

# 新井南山遺跡 手代木田向西遺跡

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道  
新設工事地内埋蔵文化財調査報告書

平成 19 年 3 月

国土交通省 常総国道事務所  
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第267集

あら い みなみ やま  
新井南山遺跡  
て しろ ぎ た むかい にし  
手代木田向西遺跡

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道  
新設工事地内埋蔵文化財調査報告書

平成 19 年 3 月

国土交通省 常総国道事務所  
財団法人 茨城県教育財団



新井南山遺跡第1・2号溝跡完掘状況（南西から）

## 序

首都圏中央連絡自動車道の建設は、首都圏の横浜・厚木・八王子・川越・つくば・成田・木更津などの中核都市を相互に結び、交通の円滑化を図るとともに、常磐道をはじめとする国幹道や新東京国際空港に連結する主要な高速道路であり、今後の首都機能の再編成・産業活力の向上を図るための基幹施設として計画されたものです。

この事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である新井南山遺跡及び手代木田向西遺跡が存在しています。

財団法人茨城県教育財団は、国土交通省常総国道事務所から埋蔵文化財発掘調査についての委託を受け、平成17年4月から12月まで発掘調査を実施しました。

本書は、新井南山遺跡・手代木田向西遺跡の調査成果を収録したもので、本書が学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である国土交通省常総国道事務所からの多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、つくば市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、感謝申し上げます。

平成19年3月

財団法人 茨城県教育財団  
理事長 人見 實 徳

## 例 言

1 本書は、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成17年度に発掘調査を実施した。茨城県つくば市大字新井字南山75番地の1ほかに所在する新井南山遺跡、同市大字手代木田向西1285番地の4ほかに所在する手代木田向西遺跡の発掘調査報告書である。

2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

### 調 査

新井南山遺跡 平成17年4月1日～平成17年5月31日、平成17年9月1日～平成17年10月31日

手代木田向西遺跡 平成17年11月1日～平成17年12月31日

整 理 平成18年6月1日～平成18年9月31日

3 発掘調査は、調査課長川井正一のもと、以下の者が担当した。

### 新井南山遺跡

首席調査員兼班長 吉原 作平 平成17年4月1日～平成17年5月31日

首席調査員兼班長 櫻村 宣行 平成17年9月1日～平成17年10月31日

主任調査員 稲田 義弘 平成17年4月1日～平成17年5月31日

主任調査員 栗田 功

主任調査員 片野 靖久 平成17年9月1日～平成17年10月31日

調査員 鹿島 直樹

### 手代木田向西遺跡

首席調査員兼班長 櫻村 宣行 平成17年11月1日～平成17年12月31日

主任調査員 片野 靖久

調査員 鹿島 直樹

4 整理及び本書の執筆・編集は、整理第二課長大森雅之のもと、主任調査員栗田功が担当した。

5 本書の作成にあたり、新井南山遺跡の溝跡の覆土については、バリノ・サーヴェイ株式会社に土壌分析を委託し、考察は付章として巻末に掲載した。

## 凡 例

- 1 地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標を原点とし、新井南山遺跡は $X=+6,480\text{m}$ 、 $Y=+22,600\text{m}$ の交点、手代木田向西遺跡は $X=+6,400\text{m}$ 、 $Y=+23,160\text{m}$ の交点を基準点(A1a1)とした。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3、…0とし、名称は、大調査区の名称を冠して「A1a1区」、「B2b2区」のように呼称した。

- 2 実測図 一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 SI-住居跡 SK-土坑 SE-井戸跡 SD-溝跡 SF-道路跡 P-柱穴

SX-不明遺構 K-攪乱

遺物 P-土器・陶磁器 TP-拓本記録土器 Q-石器・石製品 M-金属製品

W-木製品

土層 K-攪乱

- 3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

- (1) 遺構全体図は600分の1・800分の1、遺構は60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。
- (2) 遺物は原則として3分の1の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。
- (3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

■ 焼土・施軸・火床面

■ 窠材・粘土・葺・繊維土器断面

● 土器 ○ 土製品

□ 石器・石製品

■ 木製品

△ 古銭

--- 硬化面

- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。

- 5 遺物観察表・遺構一覧表の表記については、次のとおりである。

- (1) 計測値の( )内の数値は現存値を、[ ]内の数値は推定値を示した。計測値の単位は、m、cm、gで示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

- 6 「主軸」は、窠または窠を持つ堅穴住居跡についてはそれらを通る軸線とし、他の遺構については長軸(径)を主軸とみなした。「主軸・長軸(径)方向」は主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例 N-10°-E)。

## 抄 録

ふりがな	あらいのみやまいせき		てしろぎたむかひしせいせき					
書名	新井南山遺跡		手代木田向西遺跡					
副書名	一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書							
巻次	X							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第267集							
著者名	栗田 功							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL029 (225) 6587							
発行年月日	2007 (平成19) 年3月23日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
新井南山遺跡	茨城県つくば市大字新井字南山75番地の1ほか	08220 615	36度 3分 22秒	140度 5分 11秒	20 ～ 25m	20050401 ～ 20050531 20050901 ～ 20051031	4,565㎡ 5,860㎡	一般国道468号 首都圏中央連絡 自動車道事業に 伴う事前調査
手代木田向西遺跡	茨城県つくば市大字手代木字田向西1285番地の4ほか	08220 614	36度 3分 25秒	140度 5分 28秒	20 ～ 25m	20051101 ～ 20051231	5,590㎡	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
新井南山遺跡	集落跡	縄文	堅穴住居跡	1軒	縄文土器、石器(石			
			陥し穴	1基	鏃・磨石)			
			土坑	1基				
	その他	旧石器			石器(剥片)			
		中世	溝跡	2条	土師器			
	近世	道路跡	1条	古銭				
	時期不明	土坑	11基	須恵器				
			溝跡	3条				
			ピット群	1か所				
			不明遺構	2か所				
手代木田向西遺跡	集落跡	縄文	堅穴住居跡	2軒	縄文土器、石器(石			
					鏃・磨石)			
		平安時代	堅穴住居跡	1軒	須恵器			
	その他	旧石器			石器(石核・剥片)			
	時期不明	井戸跡	1基	陶器(皿)、木枕				
			土坑	13基				
			溝跡	3条				
			ピット群	1か所				
要約	新井南山遺跡は、縄文時代・中世・近世の複合遺跡である。調査区の東部から南西に向かって、220mを超える2条の溝が並走しているのが確認されている。溝の東端には、北東から南西に向かって延びる道路跡が確認されている。手代木田向西遺跡は、縄文時代・平安時代の複合遺跡である。縄文時代の炉からは、深鉢の口縁部から胴部が2個体分出土している。旧石器時代の遺物として、新井南山遺跡からは剥片が、手代木田向西遺跡からは、石核・剥片が確認されている。							

# 目 次

序	
例言	
凡抄録	
目次	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	2
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 新井南山遺跡	8
第1節 遺跡の概要	8
第2節 基本層序	8
第3節 遺構と遺物	9
1 縄文時代の遺構と遺物	9
(1) 竪穴住居跡	9
(2) 陥し穴	10
(3) 土坑	11
2 中世の遺構と遺物	12
溝跡	12
3 近世の遺構と遺物	14
道路跡	14
4 その他の遺構と遺物	15
(1) 土坑	15
(2) 溝跡	17
(3) ビット群	19
(4) 不明遺構	20
(5) 遺構外出土遺物	21
第4節 まとめ	23
第4章 手代木田向西遺跡	29
第1節 遺跡の概要	29
第2節 基本層序	29
第3節 遺構と遺物	31
1 縄文時代の遺構と遺物	31
竪穴住居跡	31
2 平安時代の遺構と遺物	36
竪穴住居跡	36
3 その他の遺構と遺物	37
(1) 井戸跡	37
(2) 土坑	39
(3) 溝跡	41
(4) ビット群	41
(5) 遺構外出土遺物	42
第4節 まとめ	44
付章 新井南山遺跡における溝埋積物のテフラ分析	47
写真図版	



# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

国土交通省は、首都機能の再編成・産業活力の向上と交通の円滑化を図るために、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道事業（つくばIC～国道408号間）を進めている。

平成13年10月17日、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長（旧常総国道工事事務所長）は、茨城県教育委員会教育長に対して、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道事業地内における埋蔵文化財の有無及びその取り扱いについて照会した。

これを受けて茨城県教育委員会は、平成15年2月6日、20日に新井南山遺跡、平成16年11月5日に手代木田向西遺跡の現地踏査を、平成16年11月29日・30日、12月1日・2日・9日・10日に手代木田向西遺跡、平成17年2月9日・10日・14日～17日、7月5日～7日に新井南山遺跡の試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。茨城県教育委員会教育長は、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長あてに、平成16年12月14日に事業地内に手代木田向西遺跡が所在する旨を、平成17年2月21日、7月15日に新井南山遺跡が所在する旨とその取り扱いについて別途協議が必要であることについて回答した。

国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、平成17年1月12日に手代木田向西遺跡、平成17年2月23日に新井南山遺跡について文化財保護法第57条の3第1項（現行94条）の規定に基づき、土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、国土交通省関東整備局常総国道事務所長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう、平成17年1月25日に手代木田向西遺跡、3月1日新井南山遺跡についてそれぞれ通知した。

国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道事業地内に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について、平成17年3月10日に新井南山遺跡について協議した。茨城県教育委員会教育長は、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長あてに、平成17年3月12日に新井南山遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

平成17年7月22日、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道事業の工事計画の変更により、茨城県教育委員会教育長は、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長と財団法人茨城県教育財団理事長に、新井南山遺跡の調査期間と面積等の変更及び手代木田向西遺跡に係る発掘調査の実施について協議した。財団法人茨城県教育財団理事長は平成17年7月22日に、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長は平成17年7月23日に、茨城県教育委員会教育長あて、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道事業にかかる発掘調査計画の変更について同意する旨回答した。

財団法人茨城県教育財団は、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成17年4月1日～5月31日、9月1日～12月31日まで発掘調査を実施することとなった。

## 第2節 調査経過

新井南山遺跡、手代木田向西遺跡は、平成17年4月1日から同年5月31日、平成17年9月1日から同年12月31日まで実施した。

その、概要を表で記載する。

新井南山遺跡（平成17年4月1日～平成17年5月31日、平成17年9月1日～平成17年10月31日）

工程 \ 期間	4 月	5 月	9 月	10 月
調査準備 表土除去 遺構確認	■		■	
遺構調査		■	■	■
遺物洗浄 注記作業		■	■	■
補足調査 撤収			■	■

手代木田向西遺跡（平成17年11月1日～平成17年12月31日）

工程 \ 期間	11 月	12 月
調査準備 表土除去 遺構確認	■	
遺構調査	■	■
遺物洗浄 注記作業	■	■
補足調査 撤収		■

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

新井南山遺跡及び手代木田向西遺跡は、つくば市の南東部に立地し、東を流れる小野川と西を流れる東谷田川、蓮沼川に挟まれた南北に伸びる筑波稲敷台地上に位置している。この台地は、筑波山を中心とする筑波山塊と接し、東を霞ヶ浦に流入する桜川と西を利根川に合流する小貝川の二つの河川によって挟まれた標高20～25mほどの平坦な地形である。台地は東から花室川、小野川、蓮沼川、東谷田川、西谷田川などの中小河川が北から南に向かって流れて、浅い谷津や低地が樹枝状に入り組んでいる。地質的には、貝化石を産する海成の砂層である成田層を基盤として、その上に竜ヶ崎層と呼ばれる斜交層理の顕著な砂層・砂礫層、さらに常総粘土層と呼ばれる泥質粘土層（0.3～0.5m）、褐色の関東ローム層（0.2～2.5m）が連続して堆積し、最上部は腐食土層となっている<sup>3)</sup>。

新井南山遺跡は、蓮沼川と東谷田川の合流点より約1.5km上流の蓮沼川左岸の標高約23mの平坦な台地上に位置し、蓮沼川と並行するよう走る市道西側に接している。台地は主に畑地・住宅地・平地林として利用され、周辺の低地は水田として利用されている。当遺跡の調査前の現況は、山林及び宅地である。手代木田向西遺跡は、新井南山遺跡の東約0.5kmの標高22.5mの平坦な台地上に位置し、蓮沼川と並行するよう走る市道東側に接している。台地は主に畑地・住宅地・平地林として利用され、周辺の低地は水田として利用されている。当遺跡の調査前の現況は、山林及び畑地である。

### 第2節 歴史的環境

新井南山遺跡及び手代木田向西遺跡周辺の東谷田川、西谷田川、蓮沼川、小野川流域の台地上には、縄文時代から近世にかけての遺跡が数多く存在している。ここでは、当遺跡の周辺及び、関連する遺跡の概要について記述する。

旧石器時代の遺跡では、小野川を望む台地縁辺部に点在している。市ノ台屋敷遺跡<sup>4)</sup>からは角錐状石器が出土している<sup>5)</sup>。下大井遺跡<sup>6)</sup>からは、ナイフ形石器、剥片が出土しており、石器製作跡の可能性が指摘されている。東谷田川流域では、烏名前野東遺跡<sup>7)</sup>からナイフ形石器や剥片、面野井北の前遺跡<sup>8)</sup>から荒屋形石器などが確認されている。

縄文時代になると、集落が形成されるようになる。西谷田川左岸の台地縁辺部には境松遺跡<sup>9)</sup>が、小野川右岸には下大井遺跡、大井遺跡、左岸には中内西ノ妻遺跡<sup>10)</sup>などが存在している。境松遺跡<sup>9)</sup>では、縄文時代前期の住居跡が8軒、中期の住居跡が42軒、土坑は袋状土坑を含め240基以上が確認されている。中内西ノ妻遺跡<sup>10)</sup>は氣場としての陥し穴が数基ずつ直線的に並んで、検出されている。

弥生時代の遺跡は少なく境松遺跡、蓮沼川左岸に位置する刈間神田遺跡<sup>11)</sup>が確認されているのみである。境松貝塚からは、竪穴住居跡6軒と弥生時代中期から後期最終末に比定される壺、付付壺、甗が出土している。

古墳時代になると遺跡数は増加する。集落としては、前期は行人田遺跡、中期は中内西ノ妻遺跡、中期から後期は馬場遺跡、行人田遺跡、下大井遺跡がある。

奈良・平安時代になると、律令体制の確立と共に当遺跡の所在する谷田部地区は、河内郡に編入されること

になる。河内郡衙は、当遺跡から、北北東に7.5kmの距離に位置する桜地区の西坪遺跡付近に所在する。『和妙類聚抄』によれば、谷田部地区は河内郡八郡部<sup>やまのやちふ</sup>に属し、仁徳天皇の紀八田若郎女のために八田部を置いた所とされており、地名の語源となっている<sup>7)</sup>。

奈良・平安時代の遺跡は、鳥名熊の山遺跡<44>を中心に、東谷田川右岸に鳥名本田遺跡<27>、鳥名八幡前遺跡<22>、鳥名前野東遺跡、左岸には面野井南遺跡<37>、面野井北の前遺跡が確認されている。平成15年4月1日から平成16年6月30日までの、鳥名熊の山遺跡<sup>8)</sup>の調査からは、奈良時代の堅穴住居跡53軒、溝跡2条、井戸跡1基、平安時代の堅穴住居跡77軒、溝跡2条、井戸1基跡が確認されている。

中世以降で確認されている遺構は、溝跡、井戸跡、道路跡である。小貝川左岸に沿って広がる低地を臨む台地縁辺部に位置する、前田村遺跡<sup>9)</sup>・K区<sup>10)</sup>からは、中世の井戸跡5基、溝跡4条が検出され、土師質土器・陶器が出土している。東谷田川と逢沼川の合流点より約1km上流の東谷田川右岸の台地縁辺部に位置する鳥名熊の山遺跡<sup>8)</sup>からは中近世の井戸跡14基、道路状遺構1条が確認され土師質土器・古銭等が出土している。近世では、道路状遺構1条が検出され、銅銭・陶器・磁器等が出土している。鳥名前野東遺跡<sup>10)</sup>からは近世の溝跡31条、道路跡4条が確認されている。

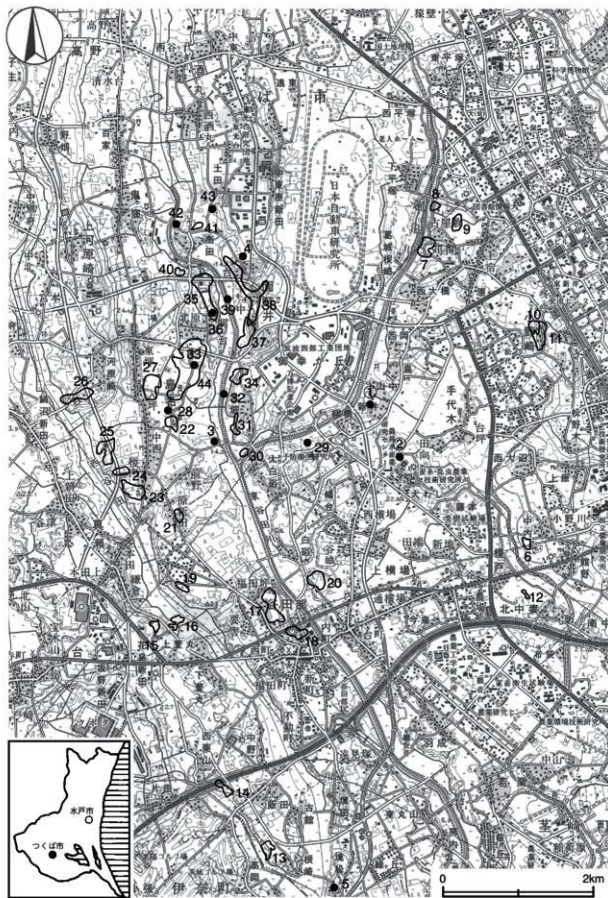
\*文中の〈 〉内の番号は、表1、第2図中の該当番号と同じである。

#### 註

- 1) 日本の地質『関東地方』編集委員会『日本の地質3 関東地方』共立出版 1986年10月
- 2) 高田和宏「一般国道6号牛久土浦バイパス改修工事地内埋蔵文化財調査報告書 市ノ台屋敷遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第198集 2003年3月
- 3) 川津法伸「一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 下大井遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第171集 2001年3月
- 4) 寺田千穂・田原康司・梅澤貴司「鳥名・福田坪一体型特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅶ 鳥名前野東遺跡・鳥名境松遺跡・矢田部連遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第191集 2002年3月
- 5) 久野俊彦「主要地方道取手筑波線道路改良工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書 境松遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第41集 1987年3月
- 6) 後藤孝行「一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書 中内西の妻遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第234集 2005年3月
- 7) 池邊彌『倭名類聚抄郡郷里名考證』吉川弘文館 1981年2月
- 8) 小林孝・飯島一生「伊奈・谷和原丘陵部特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 前田村遺跡」・K区」『茨城県教育財団文化財調査報告』第147集 1999年3月
- 9) 田中幸夫・酒井雄一・田月淳一・松本直人・委村裕「鳥名・福田坪一体型特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅶ 鳥名熊の山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第264集 2006年3月
- 10) 前掲文献4)と同じ



第1図 新井南山遺跡調査区設定図



第2図 新井南山遺跡・手代木田向西遺跡周辺遺跡分布図(国土地理院5万分の1「土浦」)

表1 新井南山遺跡・手代木田向西遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代					番号	遺跡名	時代							
		旧石器	縄文	古墳	奈・平	中世			近世	旧石器	縄文	古墳	奈・平	中世	近世	
①	新井南山遺跡	○				○	○	23	鳥名榎内南遺跡	○			○	○		
②	手代木田向西遺跡	○				○		24	鳥名榎内遺跡				○			
3	鳥名前野東遺跡	○			○	○	○	25	鳥名ツバタ遺跡	○			○			
4	面野井北の前遺跡				○	○	○	26	下河原崎高山古墳群				○			
5	境松遺跡	○	○	○			○	27	鳥名本田遺跡				○	○	○	○
6	中内西ノ妻遺跡	○			○	○		28	鳥名薬師遺跡				○			
7	苺間神田遺跡	○	○	○	○	○	○	29	柳橋遺跡				○	○		
8	苺間城跡						○	○	30	平後遺跡				○		○
9	苺間六十目遺跡				○	○	○	○	31	水堀道後前遺跡			○	○	○	
10	小野崎館遺跡						○	○	32	水堀屋敷添遺跡			○	○		
11	小野崎宿遺跡						○	○	33	鳥名熊の山古墳群				○		
12	榎戸大鏡遺跡	○					○	○	34	水堀下道遺跡				○	○	
13	根崎遺跡	○	○		○	○	○	35	鳥名関ノ台古墳群				○			
14	西栗山遺跡				○			36	鳥名関ノ台南B遺跡				○	○		
15	真瀬三度山遺跡	○			○		○	37	面野井南遺跡				○	○	○	○
16	上萱丸古屋敷遺跡	○			○		○	38	面野井古墳群				○			
17	谷田部福田前遺跡	○			○	○		39	面野井城跡						○	○
18	谷田部城跡						○	○	40	鳥名関ノ台遺跡				○		
19	谷田部漆遺跡	○			○	○		41	高田遺跡				○	○		
20	谷田部台成井遺跡	○						42	高田和田台遺跡				○	○		
21	鳥名タカド口遺跡	○			○			43	高田原山遺跡				○			
22	鳥名八幡前遺跡				○	○	○	44	鳥名熊の山遺跡	○			○	○	○	○

## 第3章 新井南山遺跡

### 第1節 遺跡の概要

新井南山遺跡は、茨城県つくば市大字新井字南山75番地1のほかにも所在し、連沼川左岸の標高20～25mほどの平坦な台地上に位置している。縄文時代前期を中心とした縄文時代・中世・近世の複合遺跡である。調査区は、調査区域を5つに分け、便宜的にⅠ区からⅤ区とした(第1図)。調査区域の現況は山林及び宅地であり、調査対象面積は10,425㎡である。

今回の調査によって、縄文時代の堅穴住居跡1軒、陥し穴1基、土坑1基、中世の溝跡2条、近世の道路跡1条、時期不明の土坑11基、溝跡3条、ピット群1か所、不明遺構2か所などが確認された。遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に3箱出土しており、大半は縄文時代のものである。主な遺物は、縄文土器(深鉢、浅鉢)、土師器(小皿)、須恵器(坏)、陶器(皿)、石器(石核・剥片・石錐・磨石)、古銭などである。

### 第2節 基本層序

調査Ⅰ区のE6d4区にテストピットを設定、深さ2.2mまで掘り下げて基本層序の観察を行った。テストピットの観察結果は、以下の通りである。

第1層は黒褐色の耕作土で、ローム粒子を少量含んでいる。層厚は30～50cmである。

第2層は極暗褐色の表土からローム層への漸移層で、ローム粒子を中量含んでいる。層厚は5～30cmである。

第3層は褐色のソフトローム層で、ガラス質粒子を極微量含んでいる。締まりはやや強い。層厚は8～20cmである。

第4層は褐色のハードローム層で、層厚は20～35cmである。

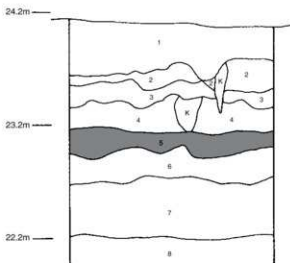
第5層は暗褐色のハードローム層で、第2黒色帯に相当すると考えられる。層厚は10～25cmである。

第6層は赤色粒子を微量含む褐色のハードローム層で、層厚は17～30cmである。

第7層は褐色のハードローム層で、層厚は45～55cmである。

第8層は暗褐色の粘土質層で、粘性・締まりはともに強く、層厚は未掘のため確認できなかった。

なお、遺構は、第2層及び第3層上面で確認できた。



第3図 基本土層図



## 第3節 遺構と遺物

## 1 縄文時代の遺構と遺物

竪穴住居跡1軒、陥し穴1基、土坑1基が確認された。以下、確認された遺構と遺物について記述する。

## (1) 竪穴住居跡

## 第1号住居跡 (第4・5図)

**位置** 調査区I区南部のG5b9区で、標高24.0mほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第3号土坑、第3号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** 長径3.78m、短径3.58mの不整形円形と推定される。壁高は最大26cmで、外傾して立ち上がっている。

**床** 平坦である。

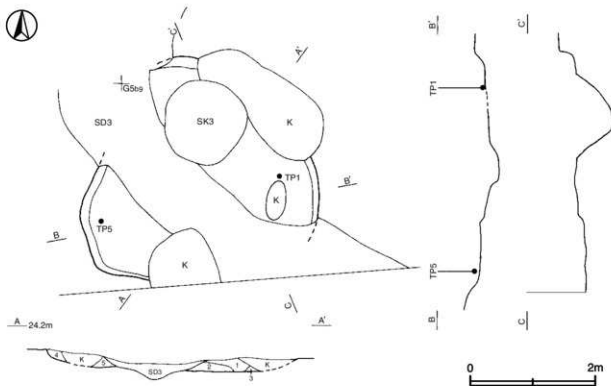
**覆土** 5層からなり、ロームブロックを含む不規則な堆積状況から、人為堆積と考えられる。

## 土層解説

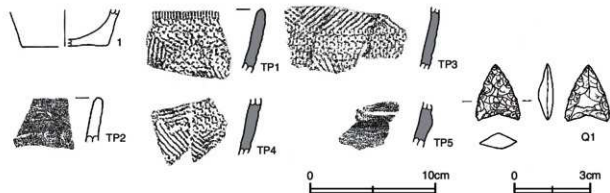
- |       |                       |      |                  |
|-------|-----------------------|------|------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化物微量       | 4 褐色 | ロームブロック多量        |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 褐色 | ロームブロック多量、炭化粒子微量 |
| 3 褐色  | ロームブロック多量、焼土粒子微量      |      |                  |

**遺物出土状況** 縄文土器片28点(口縁部1、胴部26、底部1)、石器1点(石鏃)が出土している。TP5は覆土中層、TP1は床面から、1・TP2・TP4・Q1は覆土中からそれぞれ出土している。また、混入した土師器片4点(坏)、土師質土器片1点(鍋)も出土している。

**所見** 中央部を溝に掘り込まれているため、炬を確認することができなかった。さらに、北東部及び南部壁上部が、擾乱を受けているが遺構の形状や土器の出土状況から住居跡と判断した。時期は、出土土器から前期と考えられる。



第4図 第1号住居跡実測図



第5図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表（第5図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	—	(2.9)	[6.6]	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	胴部無文	覆土中	10% PL3
番号	種別	器種	胎土			色調	焼成	手法及び文様の特徴		出土位置	備考
TP1	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・繊維			にぶい褐	普通	内削ぎ・口縁部ループ文・無筋縄文		床面	PL3
TP2	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母			にぶい褐	普通	口縁部無文		覆土中	
TP3	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・繊維			にぶい褐	普通	胴部ループ文・無筋縄文		床面	PL3
TP4	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・繊維			にぶい褐	普通	胴部ループ文・無筋縄文		覆土中	PL3
TP5	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・繊維			にぶい褐	普通	沈線に沿う隆帯に円形刺突文		覆土中層	
番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質	特徴		出土位置	備考	
Q1	石鏝	2.2	1.8	0.6	1.7	黒色緻密安山岩	四基無至縁 両面側縁調整により三稜を持つ 縁部緩曲状		覆土中	PL4	

表2 縄文時代堅穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時代
								主柱穴	出入口 ピット	ピット	炉	貯蔵穴			
1	G5b9	—	不整形円形	3.78×(3.58)	16~26	平坦	—	—	—	—	—	人為	縄文土器片	縄文時代前期	

## (2) 陥し穴

### 第1号陥し穴（SK1）（第6図）

位置 調査Ⅲ区南西部のC11b6区で、標高22.0mほどの平坦な台地上に位置している。

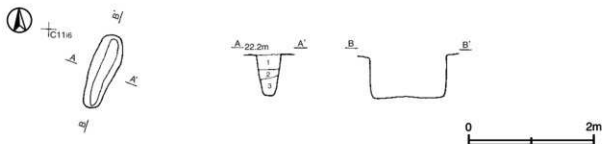
規模と形状 長径1.21m、短径0.42mの楕円形で、長径方向はN-20°-Eである。深さは65cmで、底面は狭く平坦である。短径方向の断面形はU字状で、壁は垂直に立ち上がっている。

覆土 3層からなり、レンズ状の堆積状況から自然堆積である。

#### 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量 3 暗褐色 ロームブロック多量  
2 黒褐色 ロームブロック少量

所見 時期は、出土土器がないため不明であるが、形状から縄文時代と考えられる



第6図 第1号陥し穴実測図

表3 陥し穴一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模(m, 深さはcm)		壁面	底面	覆土	備考 新旧関係(旧→新)
				長径×短径	深さ				
1	C116	N-20°-E	楕円形	1.21×0.42	65	垂直	平坦	自然	

## (3) 土坑

## 第3号土坑 (第7図)

位置 調査I区南部のG5b9区で、標高23.5mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第1号住居跡を掘り込み、第3号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長径1.36m、短径1.28mの円形である。深さは65cmで、底面は皿状である。壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

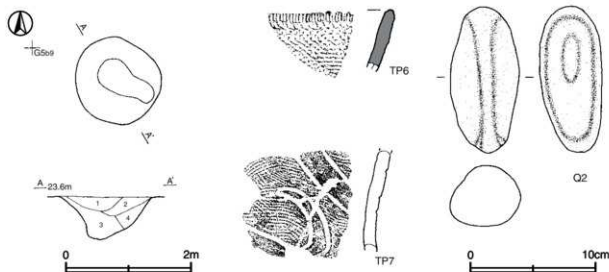
覆土 4層からなり、ロームブロックを含む不規則な堆積状況から、人為堆積である。

## 土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量  
2 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量  
3 極暗褐色 ロームブロック少量  
4 暗褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 縄文土器片12点(胴部)が出土している。TP6・TP7・Q2は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から後期前葉と考えられる。



第7図 第3号土坑・出土遺物実測図

第3号土坑出土遺物観察表(第7図)

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
TP6	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・繊維	にぶい褐色	普通	口唇部に断面状の小突起・内側壁・胴部ロープ文・無筋織文	覆土中	PL3
TP7	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	胴部北縁による区画・区画内L字の半筋織文を充填	覆土中	PL3

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質	特徴	出土位置	備考
Q2	磨石	11.5	5.4	4.8	401.0	石英黒岩	全縁縁に磨痕	覆土中	PL4

表4 土坑一覽表

番号	位置	長径方向	平面形	規模(m, 深さはcm)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 新旧関係(旧→新)
				長径×短径	深さ					
3	G5b9	—	円形	1.36×1.28	65	緩斜	皿状	人為	縄文土器・磨石	SI1→本跡→SD3

## 2 中世の遺構と遺物

溝跡2条が確認された。以下、確認された遺構と遺物について記述する。

## 溝跡

## 第1号溝跡(第8図)

**位置** 調査Ⅳ区のD10h1区から調査Ⅴ区のF4j6区で、標高23.5mの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 東端部を第1号道路に掘り込まれている。第3号不明遺構に掘り込まれて第2号不明遺構を掘り込んでいる。

**規模と形状** 南西側が調査区域外に伸びているため全容を確認できなかったが、確認できた長さは243.2mで、上幅1.07~2.65m、下幅0.18~0.58m、深さ42~90cmである。形状は底面が皿状又は平坦で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。F4i7区から北東方向N-60°-Eに直線的に伸びており、D8j1区から緩やかに東方向N-85°-Eに方向を変えて、東端部は、第1号道路跡に交わるところで徐々に浅くなり第1号道路によって掘り込まれている。

**覆土** 9層からなり、レンズ状の堆積状況から自然堆積である。

## 土層解説

1 黒褐色	炭化粒子少量、ローム粒子微量	6 暗褐色	ロームブロック中量
2 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	7 褐色	ロームブロック中量
3 暗褐色	ロームブロック少量	8 褐色	ロームブロック多量、焼土粒子少量
4 暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子少量	9 褐色	ロームブロック多量
5 暗褐色	ローム粒子中量		

**遺物出土状況** 縄文土器片11点(深鉢), 土師器片8点(甕), 須恵器片2点(蓋, 甕), 灰軸陶器片1点(瓶), 石器1点(剥片)が出土しているが、いずれも流れ込みと考えられる。

**所見** 時期は、覆土の土壌分析の結果から12世紀初頭以降から18世紀末以前と考えられる。

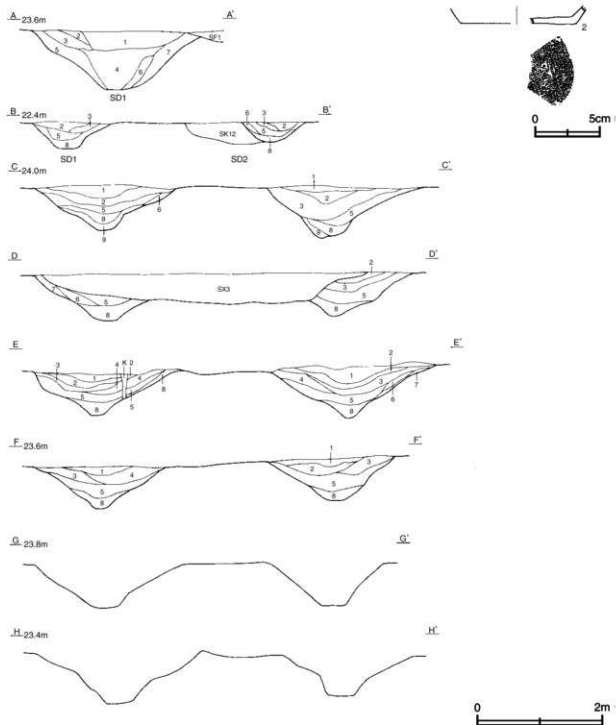
## 第2号溝跡(第8図)

**位置** 調査Ⅳ区のD9i9区から調査Ⅰ区のF5h1区で、標高23.5mの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第2・12・13号土坑を掘り込み、第3号不明遺構に掘り込まれている。

**規模と形状** 南西側が調査区域外に延びているため全容を確認できなかったが、確認できた長さは229.3mで、上幅0.98~2.72m、下幅0.19~0.62m、深さ39~82cmである。形状は底面が皿状又は平坦で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。F5h1区から北東方向 $N-60^{\circ}-E$ に直線的に延びており、E8a1区から緩やかに東方向 $N-85^{\circ}-E$ に方向を変えて、東端部は徐々に浅くなっている。

**覆土** 9層からなり、レンズ状の堆積状況から自然堆積である。



第8図 第1・2号溝跡・第1号溝跡出土遺物実測図

## 土層解説

1 黒褐色	炭化粒子少量、ローム粒子微量	6 暗褐色	ロームブロック中量
2 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	7 褐色	ロームブロック中量
3 暗褐色	ロームブロック少量	8 褐色	ロームブロック多量、焼土粒子少量
4 暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子少量	9 褐色	ロームブロック多量
5 暗褐色	ローム粒子中量		

**遺物出土状況** 縄土土器片4点(深鉢), 土師器片11点(坏1, 甕10) 須恵器片6点(坏5, 高台付坏1), 石器5点(敲石1, 剥片4)が出土しているが、いずれも流れ込みと考えられる。

**所見** 時期は、覆土の土壌分析の結果から12世紀初頭以降から18世紀末以前と考えられる。形状や覆土から、第1号溝跡と同時期に機能し、埋没したと考えられる。

## 第1号溝跡出土遺物観察表(第8図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2	須恵器	坏	-	(1.5)	[9.0]	長石・黒色粒子	灰	普通	底部回転ヘラ切り後手持ちヘラ削り	覆土中	10%

表5 溝跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模(m, 深さはcm)				壁面	底面	覆土	時期	備考 新旧関係(旧→新)
				確認長	上幅	下幅	深さ					
1	D10h1-F4並	N-40°-E N-85°-E	への字状	(243.2)	1.07-2.65	0.18-0.58	42-90	緩斜	皿状・平坦	自然	中世	SX2→本跡→SX3・SF1
2	D919-F5h1	N-60°-E N-85°-E	への字状	(229.3)	0.98-2.72	0.19-0.62	39-82	緩斜	皿状・平坦	自然	中世	SK2・SK12・SK13→本跡→SK3

## 3 近世の遺構と遺物

道路跡1条が確認された。以下、確認された遺構と遺物について記述する。

## 道路跡

## 第1号道路跡(第9図)

**位置** 調査Ⅱ区のC11e2区から調査Ⅳ区のE9g2区で、標高23.5mの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第5号土坑、第1号溝跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** C11e2区から南西方向N-43°-Eに直線的に延び、E9g2区まで続いている。確認された長さは114.5mで、幅は1.80-4.50mである。深さは18-44cmで、断面は緩やかな弧状である。

**覆土** 6層からなり、第1層から第4層はレンズ状の堆積状況から自然堆積である。硬化面は2面存在し、第5層は2面目で、人の往来により踏み固められた人為堆積の硬化面である。第6層は1面目で、ローム上面が踏み固められた締りの強い層が確認された。

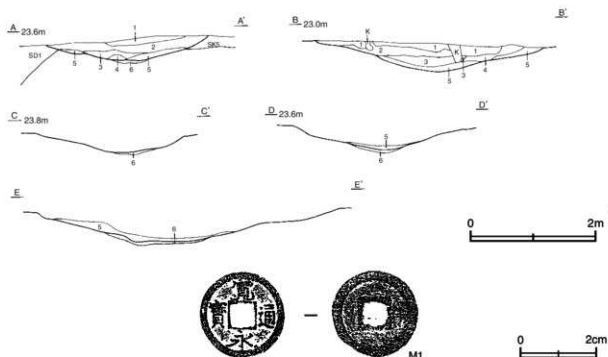
## 土層解説

1 稀暗褐色	ローム粒子少量	4 暗褐色	ロームブロック微量
2 黒褐色	ロームブロック微量	5 暗褐色	ロームブロック少量
3 黒褐色	ローム粒子少量	6 褐色	ローム粒子多量 締り強い

**遺物出土状況** 古銭1点(寛永通寶)が出土している。M1は2面目の硬化面から出土している。また、流れ込んだ土師器片82点(坏19, 甕59, 高台付坏4), 須恵器片56点(坏12, 蓋1, 盤1, 甕38, 鉢4), 陶器片1点(不明)も出土している。

**所見** 本跡は、2期にわたって使用された道路跡と考えられ、1面目は、最下層であるローム上面である。2

面目は第5層上面で、自然堆積した部分が人の往来と共に踏み固められたものと想定される。側溝や版築状の土層・補修痕等は認められないことから、集落に付随した生活路と考えられる。時期は、第1号溝を掘り込んでいることと、出土遺物から18世紀末以降と考えられる。



第9図 第1号道路跡・出土遺物実測図

第1号道路出土遺物観察表(第9図)

番号	銭名	材質	口径(cm)	孔幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	初鑄年	特 徴	出土位置	備 考
M1	寛永通寶	銅	2.33	0.64	0.11	2.4	1726		2面目硬化面	PL3

表6 道路跡一覧表

番号	位 置	方 向	形状	規模 (m、深さはcm)			側溝	硬化面	覆土	主な出土遺物	時 期	備 考 新旧関係(旧→新)
				種別長	幅	深さ						
1	C1e2-E9g2	N-43°-E	直線	(114.5)	1.80-4.30	18-44	-	2	自然	古銭(寛永通寶)	近世	SK5・SD1→本跡

#### 4 その他の遺構と遺物

##### (1) 土坑(第10図)

ここでは、時期及び性格が不明な土坑について、実測図と一覧表で掲載する。

###### 第4号土坑土層解説

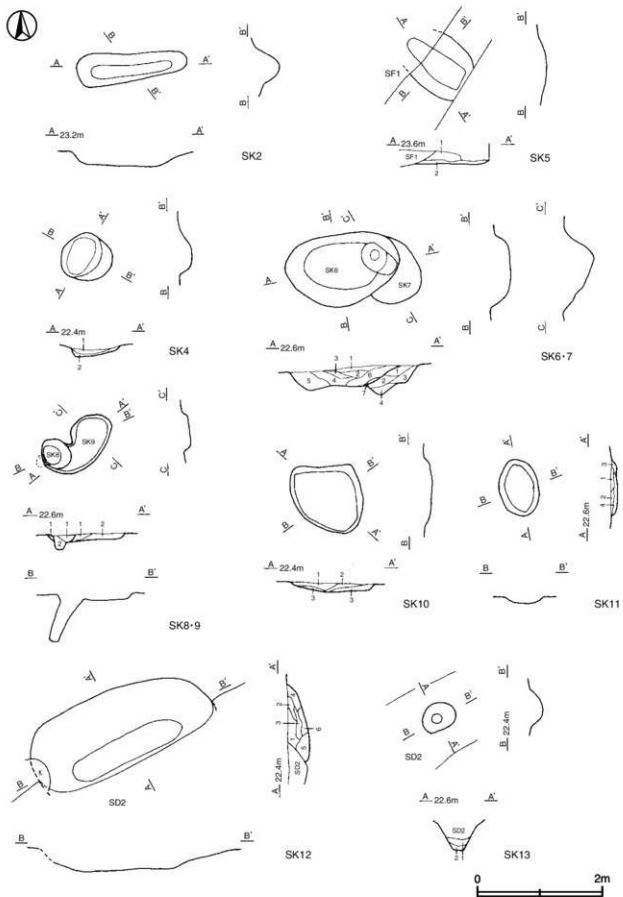
- 1 褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子中量

###### 第5号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量

###### 第6号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量
- 3 暗褐色 ロームブロック微量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量
- 6 暗褐色 ロームブロック微量
- 7 極暗褐色 ロームブロック微量



第10图 土坑实测图



## 第7号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量
- 4 褐色 ローム粒子中量

## 第8号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量

## 第9号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量

## 第10号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量

## 第11号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 4 明褐色 ローム粒子中量

## 第12号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子微量
- 3 極暗褐色 ローム粒子微量
- 4 極暗褐色 ロームブロック微量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量
- 6 暗褐色 ロームブロック少量

## 第13号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量

表7 土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模 (m深さはcm)		壁面	底面	覆土	備考 新旧関係 (旧→新)
				長径×短径	深さ				
2	E 5 f4	N-84°-E	楕円形	1.75×0.45	25	緩斜	平坦	不明	本跡→SD2
4	E 7 d8	-	円形	0.79×0.74	15	緩斜	平坦	自然	
5	D10f1	N-52°-E	[楕円形]	(0.87)×(0.78)	10	緩斜	平坦	自然	本跡→SF1
6	E 8 d5	N-85°-E	楕円形	1.84×1.08	32	緩斜	平坦	人為	SK7→本跡
7	E 8 d6	N-40°-E	[楕円形]	(1.04)×0.88	46	緩斜	皿状	人為	本跡→SK6
8	E 8 b1	N-62°-W	楕円形	0.48×0.41	70	緩斜	平坦	自然	SK9→本跡
9	E 8 b1	N-60°-E	不整楕円形	1.24×0.61	9	外傾	平坦	自然	本跡→SK8
10	E 7 b4	N-45°-E	不整楕円形	1.32×1.06	14	緩斜	平坦	自然	
11	E 7 e6	N-10°-E	楕円形	0.90×0.63	9	緩斜	平坦	自然	
12	E 7 b9	N-64°-E	[楕円形]	[2.99]×(1.22)	34	緩斜	平坦	人為	本跡→SD2
13	E 7 e3	N-27°-E	楕円形	0.56×0.43	20	緩斜	平坦	自然	本跡→SD2

## (2) 溝跡

## 第3号溝跡 (第11図)

位置 調査I区のF 5 j9区からG 5 b9区で、標高24.0mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第1号住居跡、第3号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 北側と南側が調査区域外に延びているため全容を確認できなかった。確認できた長さは、12.9mで、上幅1.90~3.13m、下幅0.60~0.82m、深さ38~50cmである。F 5 j9区から北東方向N-35°-Eに直線的に延び、G 5 a8区でL字状に方向を変え北西方向N-40°-Wで直線的にG 5 b9区まで延びている。底面は緩やかな弧状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 4層からなり、レンズ状の堆積状況から自然堆積である。

## 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量
- 4 褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 縄文土器片25点 (深鉢23, 鉢2), 土師器片4点 (甕) が出土しているが、いずれも流れ込みと考えられる。

所見 出土土器がないため、時期及び性格は不明である。

#### 第4号溝跡 (第11図)

位置 調査Ⅳ区のD9j7区からD9j8区で、標高23.5mの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 規模は、長さ5.86m、上幅0.24~0.70m、下幅0.15~0.40mで、深さは7~27cmである。D9j7区から北東方向N-87°-Eに直線的に延びており、底面は平坦で壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 4層からなり、レンズ状の堆積状況から自然堆積である。

##### 土層解説

- |               |                 |
|---------------|-----------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子少量 | 3 褐色 ロームブロック微量  |
| 2 暗褐色 ローム粒子中量 | 4 暗褐色 ロームブロック中量 |

遺物出土状況 縄文土器片5点(深鉢)、須恵器1点(坏)が出土しているが、いずれも流れ込みと考えられる。

所見 出土土器がないため、時期及び性格は不明である。

#### 第5号溝跡 (第11図)

位置 調査Ⅳ区のD9j4区からD9j6区、標高23.5mの平坦な台地上に位置している。

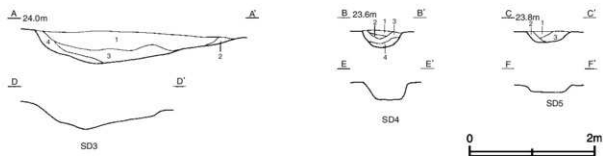
規模と形状 規模は、長さ8.21m、上幅0.38~0.84m、下幅0.22~0.56mで、深さは11~16cmである。D9j4区から北東方向N-89°-Eに直線的に延びており、底面が緩い弧状で壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 3層からなり、レンズ状の堆積状況から自然堆積である。

##### 土層解説

- |               |                     |
|---------------|---------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子少量 | 3 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子微量 |                     |

所見 出土土器がないため、時期及び性格は不明である。



第11図 第3・4・5号溝跡実測図

表8 溝跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模 (m, 深さ12cm)				壁面	底面	覆土	時期	備考 新旧関係 (旧→新)
				確認長	上幅	下幅	深さ					
3	F5j~G5j	N-35°-E N-40°-W	L字状	12.90	1.90~3.13	0.60~0.82	38~50	緩斜	皿状	自然	不明	SI1→SK3→本跡
4	D9j7~D9j8	N-87°-E	直線	5.86	0.24~0.70	0.15~0.40	7~27	外傾	平坦	自然	不明	
5	D9j4~D9j6	N-89°-E	直線	8.21	0.38~0.84	0.22~0.56	11~16	外傾	平坦	自然	不明	

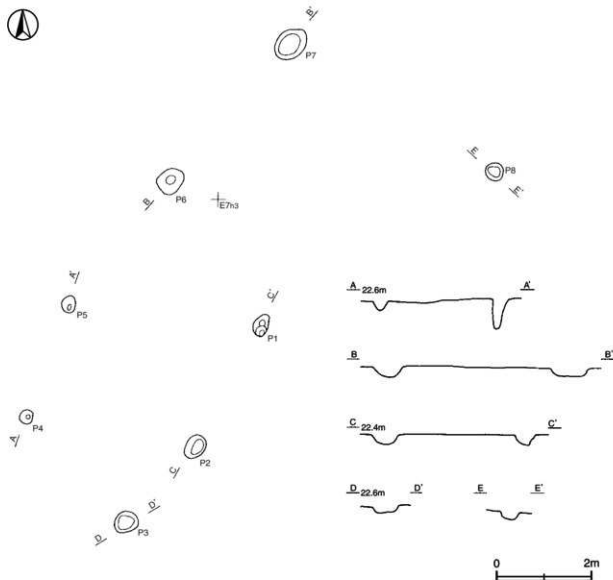
## (3) ビット群

## 第1号ビット群 (第12図)

位置 調査Ⅳ区南西部のE7g2～E7i2区で、標高22.5mの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 南北12m、東西12mの範囲から、8基のビットが確認された。径(長径)28～76cmの円形又は楕円形で、深さは14～64cmである。

所見 時期及び性格は、配列に規則性が見られないことや出土土器がないため不明である。



第12図 第1号ビット群実測図

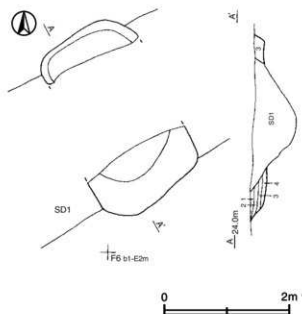
第1号ビット群計測表 (第12図)

番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P1	44	30	24	P4	28	27	18	P7	76	54	16
P2	54	38	18	P5	35	37	64	P8	37	37	18
P3	50	44	14	P6	54	37	20				

(4) 不明遺構

第2号不明遺構 (第13図)

位置 調査I区中央部のF 6 a1区で、標高24.0mほどの平坦な台地上に位置している。



重複関係 第1号溝跡に掘り込まれている。

規模と形状 長径2.90m、短径1.75mの楕円形で、長径方向はN-31°-Wである。深さは22cmで、底面は平坦である。壁は、緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 4層からなり、炭化物を多量に含む層と少量含む層が互層に堆積している状況から、人為堆積である。

土層解説

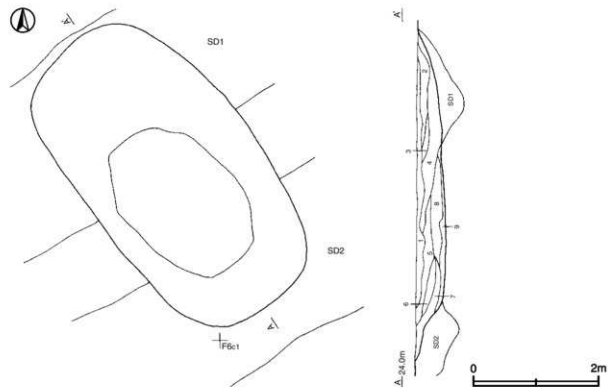
- 1 暗褐色 ローム粒子中量、炭化物少量
- 2 黒褐色 炭化物多量、ローム粒子・焼土粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量、炭化物少量
- 4 極暗褐色 炭化物中量、ローム粒子少量

所見 出土土器がないため、時期及び性格は不明である。

第13図 第2号不明遺構実測図

第3号不明遺構 (第14図)

位置 調査I区中央部のF 5 b0区で、標高24.0mほどの平坦な台地上に位置している。



第14図 第3号不明遺構実測図

**重複関係** 第1・2号溝跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長径5.16m、短径2.75mの楕円形で、長径方向はN-36°-Wである。深さは45cmで、底部は平坦である。壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

**覆土** 9層からなり、ロームブロック・炭化物・焼土を各層に含んでいることから、人為堆積である。

**土層解説**

- |                              |                              |
|------------------------------|------------------------------|
| 1 黒褐色 炭化物中量、ロームブロック・焼土粒子少量   | 6 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量   |
| 2 暗褐色 ロームブロック中量、炭化物・焼土粒子微量   | 7 極暗褐色 ロームブロック・炭化物少量         |
| 3 暗褐色 ロームブロック・炭化物中量、焼土粒子少量   | 8 暗褐色 ロームブロック中量、炭化物微量        |
| 4 極暗褐色 ロームブロック・炭化物・焼土粒子少量    | 9 黒褐色 炭化物多量、ロームブロック少量、焼土粒子微量 |
| 5 黒褐色 炭化物中量、ロームブロック・焼土ブロック少量 |                              |

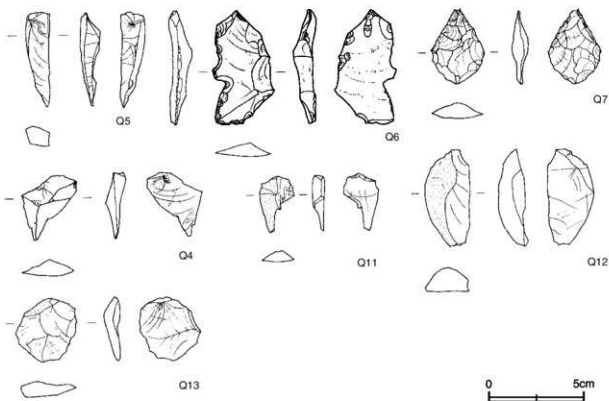
**所見** 出土土器がないため、時期及び性格は、不明である。

表9 不明遺構一覧表

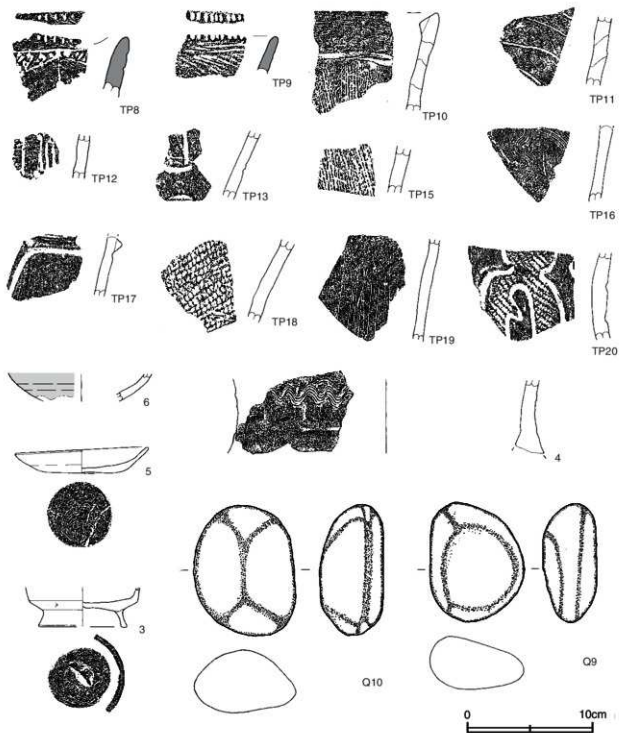
番号	位置	長径方向	平面形	規模 (m、深さ12cm)		壁面	底面	覆土	備考 新旧関係 (旧→新)
				長径×短径	深さ				
2	F 6 a1	N-31°-W	楕円形	2.90×1.75	22	緩斜	平坦	人為	本跡→SD1
3	F 5 b0	N-36°-W	楕円形	5.16×2.75	45	緩斜	平坦	人為	SD1・SD2→本跡

(5) 遺構外出土遺物 (第15・16図)

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物のうち、特徴的なものを抽出して記載する。なお、実測図と遺物観察表で示した。



第15図 遺構外出土遺物実測図(1)



第16図 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物観察表 (第15・16図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
3	須恵器	高台付坏	—	(3.1)	[6.9]	長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ切り	SD2覆土中	30% PL3
4	須恵器	甕	—	(5.9)	—	長石・雲母	灰	普通	胴部に5条1単位の間隔による波状文が走る	SF1覆土中	
5	土師器	小皿	10.4	2.1	5.6	長石・石英・黒色砂子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	SD2覆土中	PL3

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	胎色	施文	手法及び文様の特徴	産地・年代	出土位置	備考
6	陶器	天目茶	—	(2.2)	—	にぶい黄褐色	赤褐色	普通	体部外面下端磨跡 内・外面クロコナテ	瀬戸・美濃系	I区表土中	PL3
番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴			出土位置	備考		
TP8	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・繊維	赤褐色	普通	口唇部縦状工具によるきざみ 口縁部沈線による環状のモチーフが施された交差に円形彫文 区画内刷文			I区表土中	PL3		
TP9	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・繊維	橙	普通	口唇部削み 口縁部貝殻象嵌文			I区表土中			
TP10	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁内面に浅きもつ 口縁部無文の下部に沈線が施る 胴部縦位の輪状文			I区表土中			
TP11	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	胴部縦位の沈線文			I区表土中			
TP12	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	胴部に斜突文と縦方向の沈線文			I区表土中			
TP13	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	浅黄橙	普通	沈線による区画文			I区表土中			
TP15	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	縦位の集合条線文			I区表土中	PL3		
TP16	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	胴部髑髏状工具による縦位の波状文			I区表土中			
TP17	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	沈線が留り幾何による区画文 幾何のコーナー部に円形刷文			I区表土中			
TP18	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	LRの単純縄文			I区表土中			
TP19	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	胴部に縦位の浅い沈線文を施文			I区表土中			
TP20	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	普通	胴部沈線による曲線的な区画内にLRの単純縄文を充填			I区表土中			
番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質	特徴		出土位置	備考		
Q4	剥片	3.4	2.9	1.0	4.9	チャート	縦長剥片 背面に前段階の剥離痕を有する		SD2 覆土中	PL4		
Q5	2次調整の有る剥片	5.1	1.3	1.1	5.6	チャート	縦長剥片 片面先端部に押圧剥離による調整		SD2 覆土中	PL4		
Q6	2次調整の有る剥片	6.1	3.3	1.2	14.7	瑪瑙	縦長剥片 左側部に押圧剥離による調整		I区表土中	PL4		
Q7	尖頭器	4.0	2.8	0.8	6.9	安山岩	全周縁押圧剥離による調整		I区表土中	PL4		
Q9	磨石	9.3	7.4	4.2	408.0	砂岩	側面磨痕		I区表土中	PL4		
Q10	磨石	10.3	8.0	5.0	602.0	石英閃緑岩	側面磨痕		I区表土中	PL4		
Q11	剥片	3.1	1.9	0.7	2.4	チャート	剥離面が残る縦長剥片		I区表土中	PL4		
Q12	剥片	5.2	2.5	1.5	16.8	黒色緻密安山岩	剥離面が残る縦長剥片		I区表土中			
Q13	剥片	3.4	3.4	0.8	6.4	頁岩	剥離面が残る剥片		I区表土中			

## 第4節 ま と め

今回の調査で、縄文時代の堅穴住居跡1軒、陥し穴1基、土坑1基、中世の溝跡2条、近世の道路跡1条、時期不明の土坑1基、溝跡3条、ピット群1か所、不明遺構2か所が確認された。また、出土遺物は旧石器時代の尖頭器から近世の古銭と多時期にわたっている。各時代における当遺跡の概要を記述しながら、特にここでは、220mを超えて並走する中世の溝跡2条と溝に交わるように接している近世の道路跡に焦点を当て、若干の考察を加えてまとめたい。

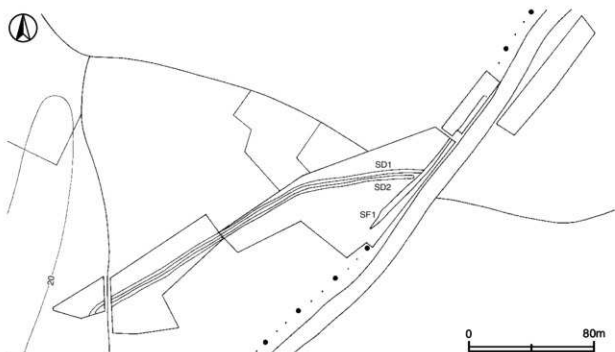
### 1 旧石器時代

旧石器時代の遺構は確認できなかった。確認できた遺物は、尖頭器1点、剥片6点である。

周辺遺跡では、小野川右岸で当遺跡から南東約8kmの小野川を望む台地縁辺部に所在する行人田遺跡から、同様の尖頭器、ナイフ形石器、有舌尖頭器が出土している<sup>1)</sup>。そのことから遺構は確認されていないが、調査区周辺は、狩猟場もしくはキャンプ地として利用していたことがうかがえるものである。

### 2 縄文時代

堅穴住居跡1軒は、調査I区の中央部南側に位置し、出土土器から前期前葉に比定される。確認できた住居跡は、北東壁の上部及び南壁の上部が攪乱を受け、更に中央部を第3号溝によって掘り込まれており、床と壁



第18図 新井南山遺跡位置図

の一部が確認できただけであった。調査区域内では1軒のみであったが、住居跡が位置している南側及び南東側は未調査であることから、本跡を含む集落は、調査区域外に広がっていると想定される。その他、確認できた遺構と遺物は、陥し穴1基と早期末から後期にかけての土器片、石鏃、磨石である。小野川流域及び東谷田川と桜川に挟まれた台地上には大小の池や沼が点在しており、当時代にも動物が飼育するのに都合の良い場所であったと考えられるだろう。

周辺遺跡では、当遺跡の南東約2kmの小野川を望む台地縁辺部に所在する中内西ノ妻遺跡から、猟場としての陥し穴が数基ずつ直線的に並んで検出されている<sup>2)</sup>。確認された遺構や遺物から当遺跡周辺では、狩猟が盛んに行われていたことがうかがわれる。

### 3 中世

並走する溝跡2条が確認されている。溝跡は、調査区域を北東から南西へ縦断している。第1号溝跡は、上幅1.07～2.65m、下幅0.18～0.58m、深さ42～90cmで、調査Ⅳ区のD10h1区から西方向(N-85°-E)へ延び、調査D8jl区で緩やかに南西方向(N-60°-E)に向きを変えて調査Ⅴ区のF4j6区まで直線的に延びている。第2号溝は、上幅0.98～2.72m、下幅0.19～0.62m、深さ39～82cmで、調査Ⅳ区のD9i9から西方向(N-85°-E)へ延び、調査E8a1区で、緩やかに南西方向(N-60°-E)に方向を変えて、F4j7区まで直線的に延びている。2条の溝跡とも、北東端が第1号道路跡に交わる付近で徐々に浅くなり、南西端は、調査区域外に延びている。

溝の覆土中からは遺構の時期を決定できる遺物が出土していないことから、構築年代及び存続時期を判断するために土壌分析を行った。土壌サンプルは、調査Ⅰ区のセクションポイントCの土層断面及び南北壁の土層断面において実施した。土壌分析の結果、構築年代は12世紀初頭以降であり、18世紀末には完全に埋没した状態であることが明らかになった。

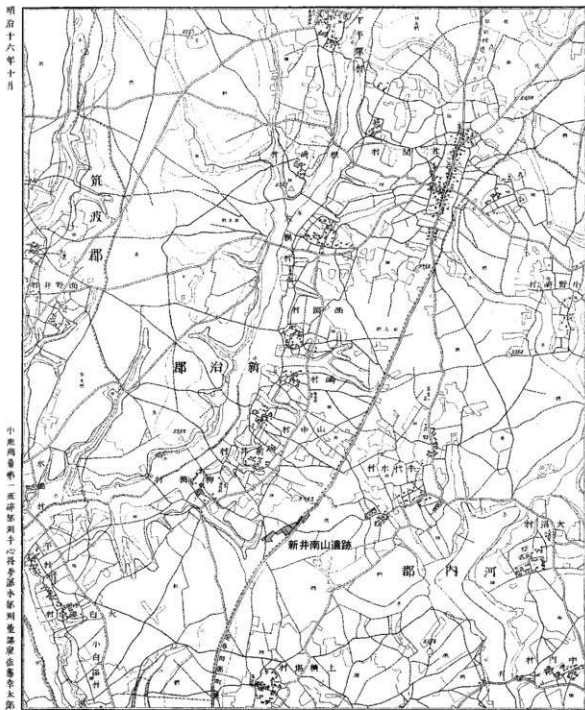
当遺跡の性格を考える上で周辺の字名に目を向けると、南東約200mの位置には「海道」、更に50mほど



茨城県常陸国新治郡河内郡手代木村間村

明治十六年十月

第三十七号之一



小黒川遺跡一底層部列子に採得した手代木村間村遺跡位置を示す

明治前期測量 2万分1フランス式彩色地図  
 筑波研究学園都市南部地区 153 (1班37号1測板) (財)日本地図センター発行  
この地図は測量法第11号附則第1項第1号に基づき、測量法第27条の1第1項の規定に基づき作成されたものである。(測量番号 甲4野測 第1号)

第19図 明治前期測量 茨城県常陸国新治郡河内郡手代木村間村

南に「海道南」、北に約2kmには「大境」という字名が残っている。これらの字名から、近くには、生活路と主要な道路の交わる場所が存在したことが想定できる。このようなことから、この2条の溝跡が道路の側溝として機能していた可能性も考えてみたい。調査では道路としての硬化面が確認できなかったことから、路面が確認面より上層に存在したならば、確認面での2条の溝跡の間隔は更に狭くなると考えられる。そのため道路と考えると、人馬が行き交うには幅が狭すぎ道路と側溝という想定には疑問が残るだろう。

道路跡と溝跡を主な遺構とする遺跡の類例としては、方形堅穴建物跡を主体とする栃木県下古館遺跡<sup>1)</sup>と道があっても集落が成立しない、山形県高瀬山遺跡<sup>2)</sup>が挙げられる。これら2つの遺跡の概要について記載し、当該遺跡の性格を考える上での一助としたい。

栃木県下古館遺跡は、遺跡の中央を南北に貫通する「うしみち」と呼ばれる道路跡を中心に堀跡で囲繞されている。13～15世紀を中心とした遺跡で堀跡内は道路跡と溝跡で区画され、方形堅穴建物跡、井戸跡、ピット群を中心として構成されている。並走する2条の溝は、「うしみち」にはほぼ直行して交わり、「うしみち」の側溝につながっている。溝の規模に対して道幅が狭いが、遺構の様相から道路跡と考えられている。

また、山形県高瀬山遺跡では、並走する2条の溝が断続的に長距離に渡って確認されている。集落は確認されておらず、方形周溝状遺構と土坑群を中心として構成されている。この並走する2条の溝は現存する農道に平行して延びており、字切り図に認められる農道と続くように延びているため、報告書では「道路状遺構」としている。以上のことから当該遺跡の並走する2条の溝跡は、道幅に対して深く幅の広い側溝をもつ道路跡と考えられる。

#### 4 近世

道路跡1条が確認されている。2面目から18世紀前葉に鋳造された寛永通寶1点が出土している。また、16世紀末から17世紀初頭の志野小皿片1点、18世紀末から19世紀初頭の馬の目皿1点、播鉢片2点の陶器も覆土中から出土している。道路跡は、明治時代前期(明治16年10月)測量の迅速測図原因<sup>3)</sup>に記載されている道幅5m程の「至谷田部町道」に沿うように延びていることから、近世においても同じ路線上に道路が存在したことを想定することができる。

#### 5 小結

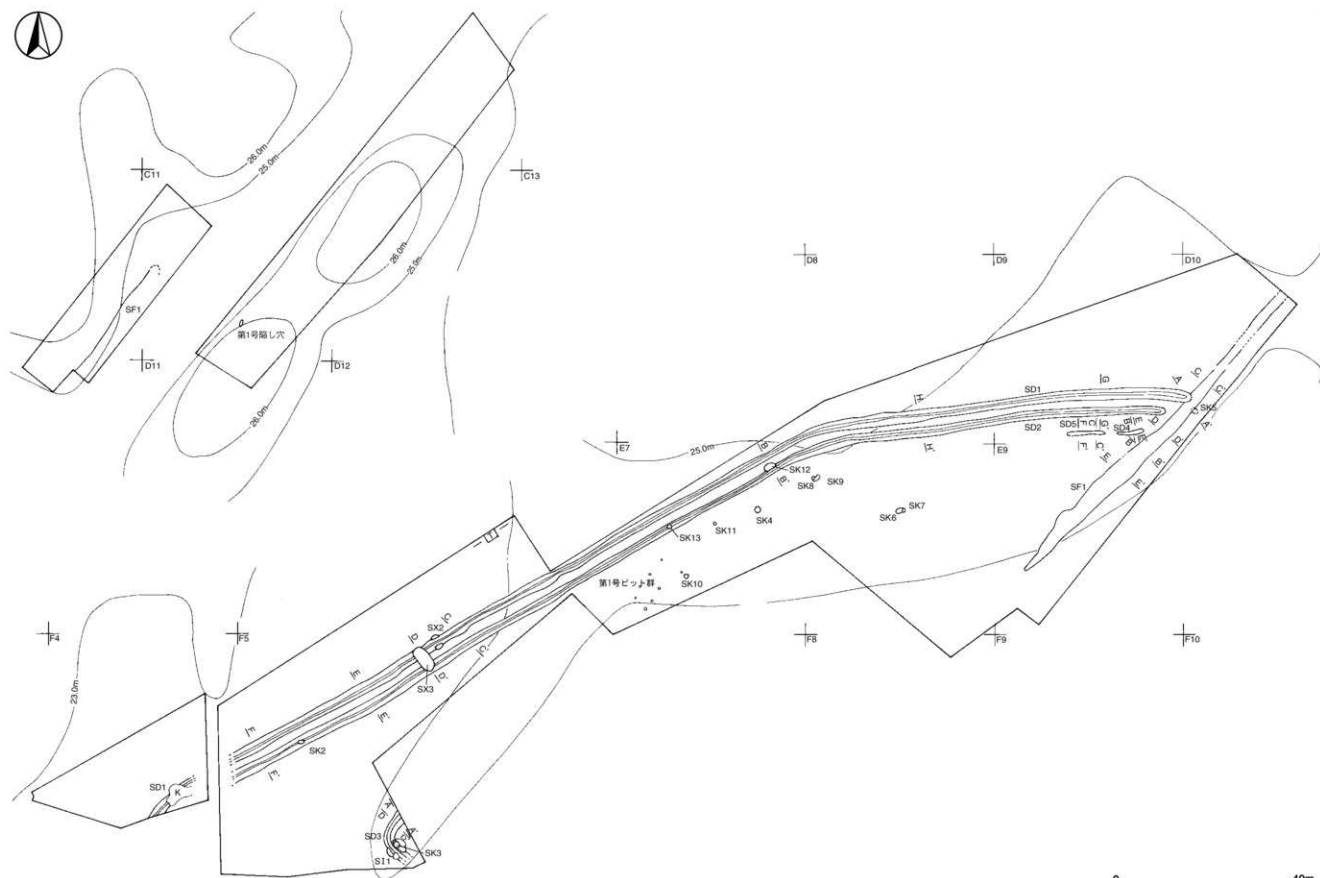
今回の調査では、旧石器時代の遺構は確認されなかったが、尖頭器や剥片が確認されている。また、縄文時代早期から後期にかけての土器片、土師器片、須恵器片、陶器片、近世の古銭等やそれに伴う遺構も確認されている。このようなことから、旧石器時代には人々の生活や狩猟の場として、周辺に人々が生活していた痕跡がうかがえる。その後、当該遺跡周辺の台地上では、縄文時代には人々が生活を営み、中・近世には人々が行き交う交通路として、近代に至るまで生活の場として利用されていたと考えられる。今回は限られた調査区域であり、遺跡の全容については今後の調査が待たれるところである。

註

- 1) 白田正子「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 馬場遺跡・行人田遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第106集、1996年3月31日
- 2) 後藤孝行「一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 中内西ノ妻遺跡」『茨城県教育財団文化財発掘調査報告』第234集、2005年3月25日
- 3) 田代隆 鈴木泰治 山口耕一「住宅・都市整備公団小山・栃木都市計画事業自治医科大学周辺地区埋蔵文化財発掘調査下古館遺跡」『栃木県埋蔵文化財報告』第166集、1995年3月31日
- 4) 丸山晶子「高瀬山遺跡(2期)第2・3次発掘調査報告書」『山形県埋蔵文化財センター調査報告』第80集、2000年10月24日
- 5) 明治前期測量 2万分の1 フランス式彩色地図—第一軍管地方二万分の一迅速測図原圖複製版—『茨城県常陸国新治郡那珂村河内郡手木村』

参考文献

- ・小野正敏「図解・日本の中世遺跡」財団法人 東京大学出版会



第17図 新井南山遺跡全体図

## 第4章 手代木田向西遺跡

### 第1節 遺跡の概要

手代木田向西遺跡は、つくば市の南東部に位置し、蓮沼川左岸の標高20～25mの平地林及び畑の広がる平坦な台地上に立地している。調査対象面積は5,590㎡である。

今回の調査によって、縄文時代中期の竪穴住居跡2軒、平安時代の竪穴住居跡1軒、時期不明の井戸跡1基、土坑13基、溝跡3条、ピット群1か所が確認された。遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に3箱出土しており、大半は縄文時代のものである。主な遺物は、縄文土器（深鉢・鉢）、須恵器（坏）、陶器（皿）、石器（石核・剥片・石鏃）などである。

### 第2節 基本層序

調査区北西部のA2f3区にテストピットを設置し、深さ1.5mまで掘り下げて基本層序の観察を行った。テストピットの観察結果は、以下の通りである。

第1層は暗褐色の耕作土で、ローム粒子を少量含んでいる。層厚は35～50cmである。

第2層は明褐色のソフトローム層で、ローム粒子を多量含んでいる。層厚は5～13cmである。

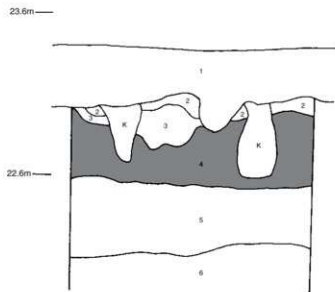
第3層は褐色のハードローム層で、ロームブロックを中量含んでいる。層厚は5～25cmである。

第4層は暗褐色のハードローム層で、ロームブロックを中量含んでいる。第2黒色帯に相当すると考えられる。層厚は7～50cmである。

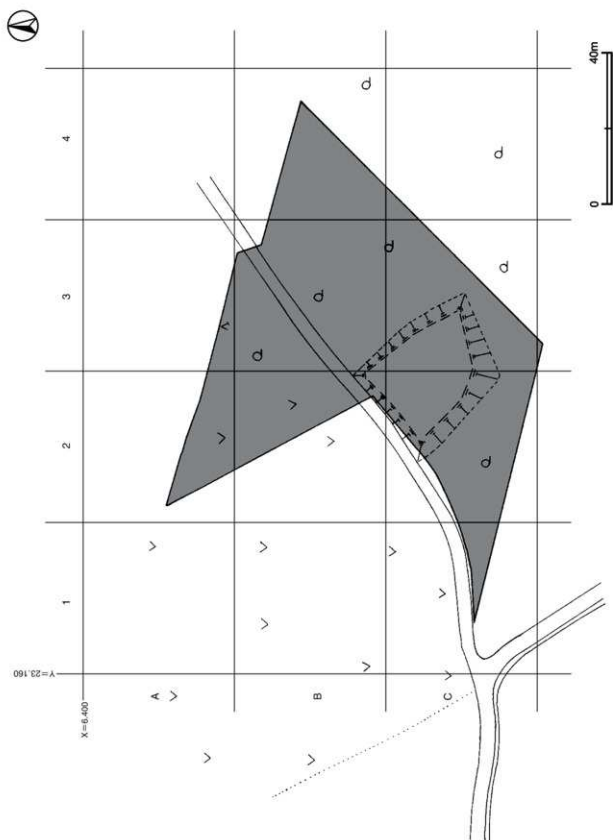
第5層は褐色のソフトローム層で、ローム粒子を多量含み、粘性が強い。層厚は30～50cmである。

第6層は明褐色のハードローム層で、ローム粒子を多量含み、粘性・締まりがともに強い。層厚は20～35cmである。

なお、遺構は、第2・3層及び第4層上面で確認できた。



第20図 基本土層図



第21図 手代木田向西遺跡調査区設定図

## 第3節 遺構と遺物

## 1 縄文時代の遺構と遺物

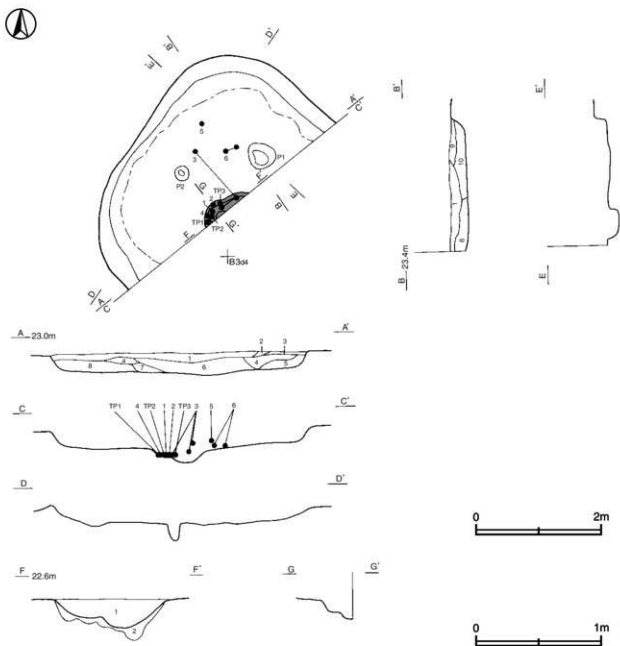
住居跡2軒が確認された。以下、確認された遺構と遺物について記述する。

## 竪穴住居跡

## 第1号住居跡（第22～24図）

**位置** 調査区北部のB3c3区で、標高23.0mほどの平坦な台地上に位置している。

**規模と形状** 南東部が調査区域外のため、確認された範囲は、長径4.10m、短径2.10mで不整形円形もしくは楕円形と推定される。壁高は最大28cmで、外傾して立ち上がっている。



第22図 第1号住居跡実測図

床 平坦である。中央部が硬化している。

炉 中央部からやや南寄りに位置している。確認された範囲は、長径64.0cm、短径22.0cmで、楕円形または円形と推定される。第1層が炉の覆土で、第2層はローム層上面が赤色硬化した層である。

炉土層解説

- |       |              |        |                         |
|-------|--------------|--------|-------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 2 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子少量 |
|-------|--------------|--------|-------------------------|

ピット 2か所。深さは、P 1が17cm、P 2が28cmで、柱穴と考えられる。

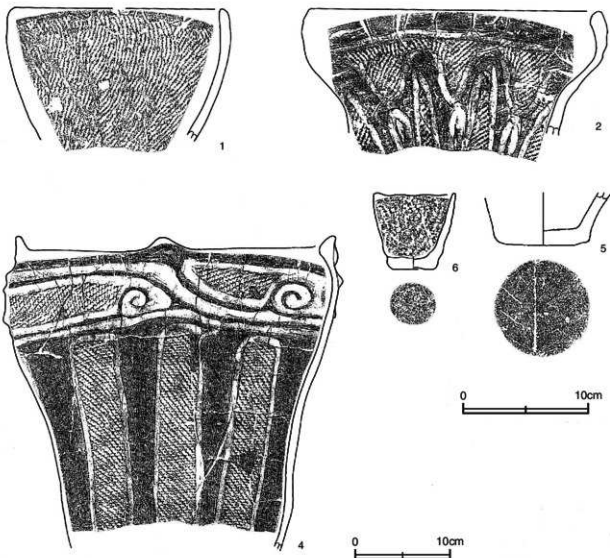
覆土 10層からなり、ロームブロックを含む不規則な堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

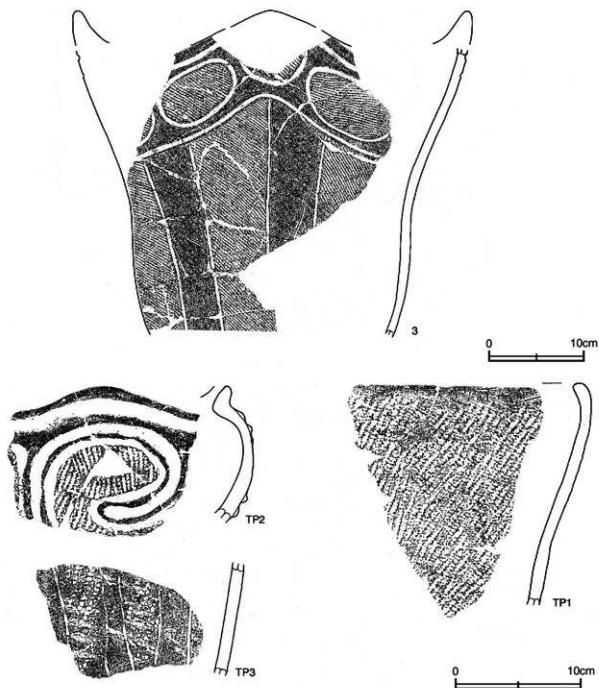
- |       |                     |        |                   |
|-------|---------------------|--------|-------------------|
| 1 褐色  | ローム粒子中量、焼土粒子微量      | 6 暗褐色  | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 褐色  | ローム粒子少量、炭化粒子微量      | 7 暗褐色  | ローム粒子・焼土粒子少量      |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量      | 8 暗褐色  | ロームブロック多量         |
| 4 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 9 褐色   | ローム粒子中量           |
| 5 褐色  | ローム粒子少量             | 10 明褐色 | ロームブロック多量・炭化粒子微量  |

遺物出土状況 縄文土器片84点(深鉢62・鉢21・ミニチュア土器1)が、炉を中心に出土している。1・2・4・TP1・TP2は、炉の覆土からつぶれた状態で、3・6は北部の床面から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後葉と考えられる。



第23図 第1号住居跡出土遺物実測図(1)



第24図 第1号住居跡出土遺物実測図(2)

第1号住居跡出土遺物観察表(第23・24図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
1	縄文土器	鉢	[16.4]	(10.4)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	多方向にRLの単筋縄文を施文	炉覆土	20% PL7
2	縄文土器	深鉢	22.9	(9.8)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部直下に窪線がある。口縁部から胴部直文にRLの単筋縄文を施文後沈線により曲線モチーフ	炉覆土	30% PL7
3	縄文土器	深鉢	—	(29.7)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部直下に沈線がある。口縁部は沈線により隅四角に曲線及びの単筋縄文を施文。口縁部を飾り出す。口縁部位置がやや異なるにより隅直文・区画内にRLの単筋縄文を施文	炉覆土	20%
4	縄文土器	深鉢	32.8	(32.6)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通		炉覆土	80% PL7
5	縄文土器	深鉢	—	(4.2)	7.3	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	胴部下端無文 底部木炭痕	覆土下層	10% PL7
6	縄文土器	ヒコヤフ	6.4	6.0	3.3	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部から胴部にRLの単筋縄文を施文 胴部下層に沈線がある	床面	80% PL7



番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
TP1	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	口唇部無文 胴部RLの単節縄文	炉覆土	PL8
TP2	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	口縁部沈線が沿う隆帯による区画文内にRLの単節縄文を充填	炉覆土	PL8
TP3	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	地文に複節縄文・沈線による懸垂文間を磨り消す	炉覆土	PL8

## 第2号住居跡 (第25・26図)

**位置** 調査区北部のB 2 d0区で、標高23.0mほどの平坦な台地上に位置している。

**規模と形状** 長径5.24m, 短径5.12mの円形である。壁高は最大で10cmで、外傾して立ち上がっている。

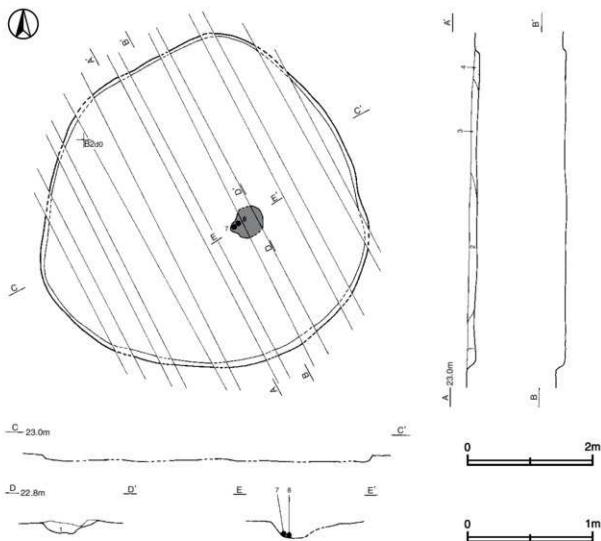
**床** ほぼ平坦である。

**炉** 中央部から東寄りに位置している。径50cmの円形で、床面を10cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱を受けての硬化があまりみられない。

### 炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量

**覆土** 4層からなり、レンズ状の堆積状況から、自然堆積と考えられる。



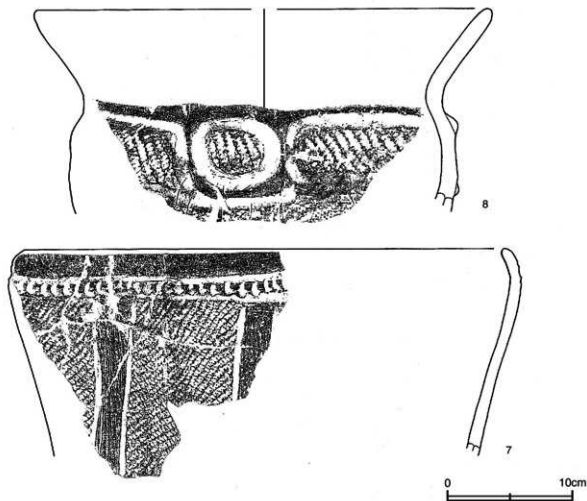
第25図 第2号住居跡実測図

## 土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量  
 2 黒褐色 炭化粒子少量、ローム粒子微量  
 3 明褐色 ロームブロック微量  
 4 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片149点(深鉢134・鉢15)が、全体的に散在した状態で出土している。また、流れ込んだ石器2点(石核・剥片), 土師器片2点(坏・高台付坏), 須恵器片2点(坏・高台付坏)も出土している。7・8は炉床からつづれた状態で出土している。

所見 時期は, 出土土器から中期後葉と考えられる。



第26図 第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表(第26図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
7	縄文土器	深鉢	37.8	(16.3)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部の波線区画内に連続斜交文、胴部直文に記の単部縄文を散在する1部の波線による細部文様を散在する	火床面	10% PL7
8	縄文土器	鉢	(35.5)	(15.8)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部直文、胴部上縁を波線がけの波線による横段反直文、反画内に記の単部縄文を散在	火床面	20% PL7

表10 縄文時代竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設				覆土	主な出土遺物	備考 (時期)	
								柱穴	出入口 (ピット)	ピット	炉				貯蔵穴
1	B3c3	—	不整形	4.10×(2.10)	22~28	平坦	—	—	—	2	1	—	人為	縄文土器片 3ニチュア土器	縄文時代中期後葉
2	B2d0	—	円形	5.24×5.12	6~10	平坦	—	—	—	—	1	—	自然	縄文土器片	縄文時代中期後葉

2 平安時代の遺構と遺物

竪穴住居跡

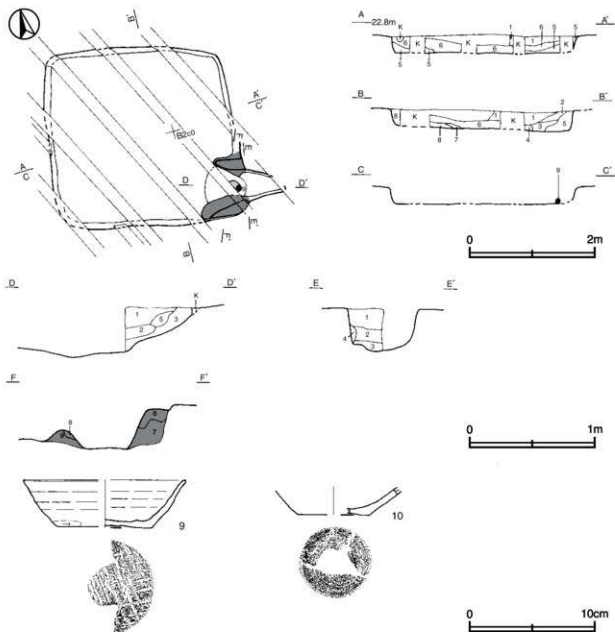
第3号住居跡 (第27図)

位置 調査区北部のB 2 b9区で、標高22.5mの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長軸2.91m、短軸2.83mの方形で、主軸方向はN-78°-Wである。壁高は最大で31cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

竈 南東コーナー部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで120cmで、袖幅は96cmである。左袖部は東壁のローム土を10cmほど掘り残して基部とし、砂質粘土で構築されている。右袖部は、南コーナー壁に床面と同じ高さの地山から砂質粘土を貼り付けて構築されている。火床部は、床面を5cmほど皿状に掘りくぼめ



第27図 第3号住居跡・出土遺物実測図

ており、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は、東壁を壁外へ60cmほど掘り込み、緩やかに外傾して立ち上がっている。

#### 覆土層解説

1	にぶい赤褐色	ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子微量	6	にぶい赤褐色	砂質粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量
2	黒褐色	焼土ブロック少量、炭化物微量	7	にぶい赤褐色	砂質粘土粒子多量、焼土粒子少量
3	赤褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子微量	8	褐色	砂質粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量
4	暗赤褐色	焼土ブロック少量、焼土粒子微量	9	にぶい褐色	砂質粘土粒子多量、ローム粒子・焼土粒子微量
5	にぶい赤褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量			

**覆土** 8層からなり、レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

#### 土層解説

1	暗褐色	ロームブロック中量	5	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
2	暗褐色	ロームブロック少量	6	褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
3	褐色	ロームブロック少量	7	褐色	ローム粒子少量
4	褐色	ローム粒子中量	8	褐色	ロームブロック中量

**遺物出土状況** 土師器片2点(坏), 須恵器片4点(坏), 土製品5点(支脚)が覆土中から出土している。他に、流れ込んだ石器4点(石鏝1・石核2・剥片1), 縄文土器片1点(鉢)も出土している。9は竈の覆土下層から逆位で、10は覆土中から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から9世紀後半と考えられる。

### 第3号住居跡出土遺物観察表(第27図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
9	須恵器	坏	(13.6)	4.0	7.8	長石・石英・雲母	灰	普通	体部内・外面ロクロナデ 裏面手廻り持ちへラ削り・底部割削へラ削り	竈火床面	50% PL7
10	須恵器	坏	—	(2.2)	5.6	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部割削へラ削り	覆土中	30%

表11 平安時代竈穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	覆土(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設				覆土	主な出土遺物	備考 (時期)
								主柱穴	付入口 ピット	ピット	竈 貯蔵穴			
3	B2b9	N-78°-W	方形	2.91×2.83	26~31	平垣	—	—	—	—	1	—	自然 須恵器坏	9世紀後半

### 3 その他の時代の遺構と遺物

#### (1) 井戸

##### 第1号井戸跡(第28図)

**位置** 調査区A 217区で、標高23.0mほどの平坦な台地上に位置している。

**規模と形状** 長径0.90m, 短径0.86mの円形である。確認面から円筒状に掘りこまれている。1.60mまで掘り下げたが、以下は湧水のため確認できなかった。

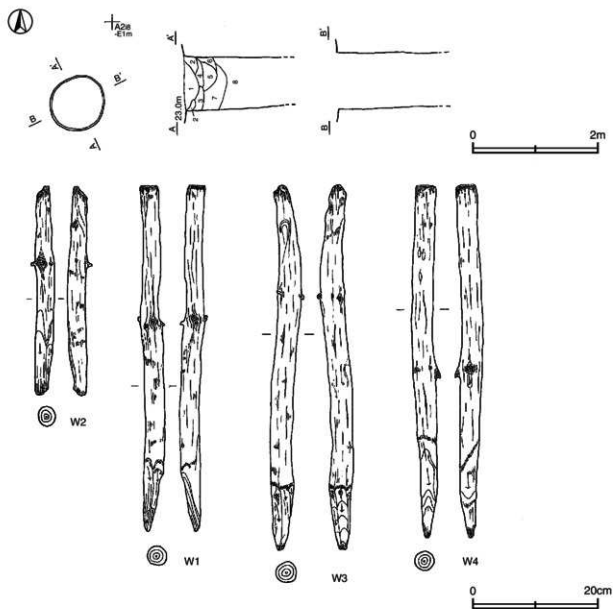
**覆土** 8層からなり、ロームブロックを含む不規則な堆積状況をから、人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

1	極暗褐色	炭化物少量、ロームブロック・焼土粒子微量	5	褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
2	明褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	6	褐色	ロームブロック少量
3	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	7	褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
4	褐色	ロームブロック微量	8	褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量

**遺物出土状況** 木杭4点が、覆土下層からまとめて投棄された状態で出土している。

**所見** 時期は、出土遺物が少ないため不明である。



第28図 第1号井戸跡・出土遺物実測図

第1号井戸跡出土遺物観察表 (第28図)

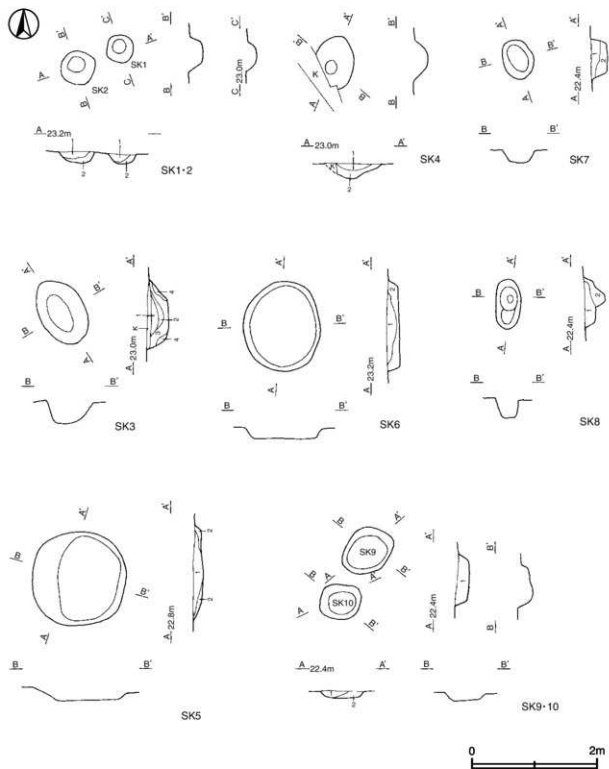
番号	器種	木取り	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	特 徴	出土位置	備 考
W 1	杭	丸材	(54.4)	3.9	3.0	先端部に鉋状工具による削り痕	覆土下層	
W 2	杭	丸材	(33.1)	3.1	3.1	先端部に鉋状工具による削り痕	覆土下層	
W 3	杭	丸材	(57.5)	3.7	3.3	先端部に鉋状工具による削り痕	覆土下層	
W 4	杭	丸材	(55.7)	3.5	2.9	先端部に鉋状工具による削り痕	覆土下層	

表12 井戸跡一覧表

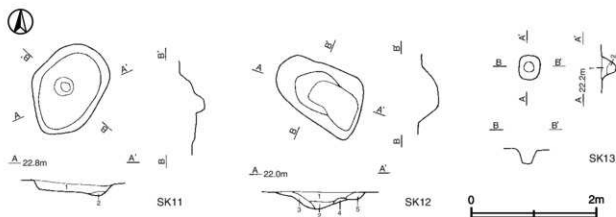
番号	位 置	長径方向	平面形	規模 (m)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備 考 新田園係(旧・新)
				長径×短径	深さ					
1	A 217	—	円形	0.90×0.86	1.60	垂直	—	人為	木杭	

## (2) 土坑 (第29・30図)

ここでは、時期及び性格が不明な土坑13基について、実測図と一覧表で掲載する。



第29図 土坑実測図(1)



第30図 土坑実測図(2)

第1号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子中量

第2号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子中量

第3号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック微量
- 4 黒暗褐色 ローム粒子中量

第4号土坑土層解説

- 1 黒暗褐色 炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

第5号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 褐色 ローム粒子中量

第6号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量
- 2 褐色 ロームブロック微量

第7号土坑土層解説

- 1 黒暗褐色 ロームブロック微量
- 2 褐色 ローム粒子中量

第8号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量

第9号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量

第10号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子多量

第11号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量

第12号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック微量
- 4 黒暗褐色 ロームブロック微量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量

第13号土坑土層解説

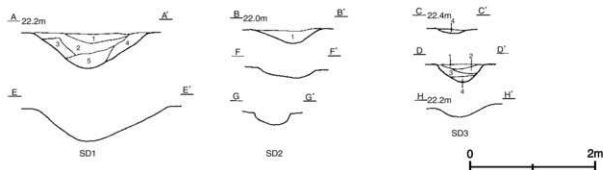
- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量

表13 土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模 (m, 深さ12cm)		壁面	底面	覆土	備考 新旧関係 (旧→新)
				長径×短径	深さ				
1	A3j5	—	円形	0.46×0.45	15	縦斜	平坦	自然	
2	A3j5	—	円形	0.59×0.56	20	外傾	平坦	自然	
3	B2f8	N-31°-E	楕円形	1.10×0.74	34	縦斜	平坦	人為	
4	B2f9	N-20°-E	[楕円形]	(0.87)×(0.63)	23	縦斜	皿状	自然	
5	C3a5	—	円形	1.50×1.48	8	縦斜	平坦	自然	
6	B3a2	N-4°-E	楕円形	1.42×1.22	22	外傾	平坦	自然	
7	C2d4	N-20°-W	楕円形	0.66×0.50	25	外傾	平坦	自然	
8	C2f3	N-1°-E	楕円形	0.78×0.37	28	縦斜	平坦	自然	
9	C2g2	N-35°-E	楕円形	0.79×0.68	21	縦斜	皿状	自然	
10	C2g2	N-73°-E	隅丸長方形	0.64×0.54	11	縦斜	平坦	自然	
11	C1f0	N-33°-E	楕円形	1.50×1.10	15	縦斜	平坦	自然	
12	C3i2	N-72°-W	隅丸長方形	1.42×0.86	30	縦斜	平坦	自然	
13	C3h3	N-2°-E	楕円形	0.36×0.32	22	外傾	平坦	自然	

## (3) 溝跡 (第31図)

ここでは、時期及び性格が不明な溝跡3条について、実測図と一覧表で掲載する。



第31図 第1・2・3号溝跡実測図

## 第1号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック微量
- 4 褐色 ロームブロック微量
- 5 褐色 ロームブロック少量

## 第3号溝跡土層解説

- 1 褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 褐色 ロームブロック中量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量

## 第2号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量

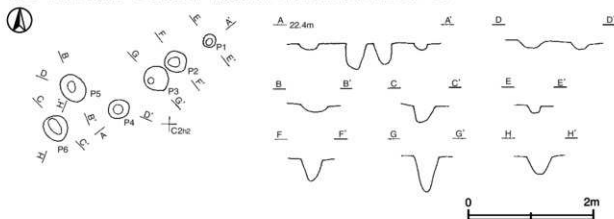
表14 溝跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模 (m, 深さ12cm)			壁面	底面	覆土	備考 新旧関係 (旧→新)
				確認長	上幅	下幅				
1	C3e6-C3f3	N-66°-E	直線	(14.74)	1.90-2.12	0.18-0.54	29-54	緩斜	皿状	自然
2	C2g8-C2h2	N-58°-E N-20°-W N-67°-E	クランク状	(32.70)	0.48-1.48	0.09-0.34	12-20	緩斜	皿状	自然
3	C3c6-C3e6	N-24°-E N-44°-W	くの字状	(11.22)	0.41-0.82	0.11-0.24	6-24	緩斜	皿状	自然

## (4) ビット群

## 第1号ビット群 (第32図)

位置 調査C2g2区～C2h1区で、標高22.4mの平坦な台地上に位置している。



第32図 第1号ビット群実測図



**規模と形状** 南北1.8m, 東西2.9mの範囲から, 不規則な6基のピットが確認された。径(長径)24~48cmの円形又は楕円形で, 深さは10~57cmである。

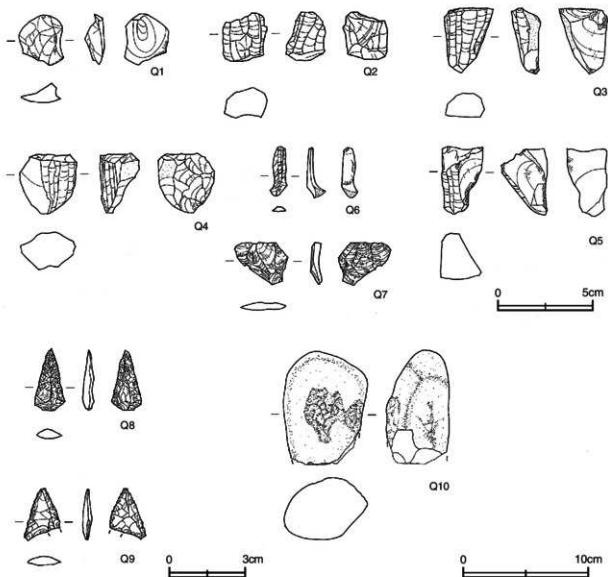
**所見** 時期及び性格は, 配列に規則性が見られないことや出土土器がないため不明である。

第1号ピット群計測表 (第32図)

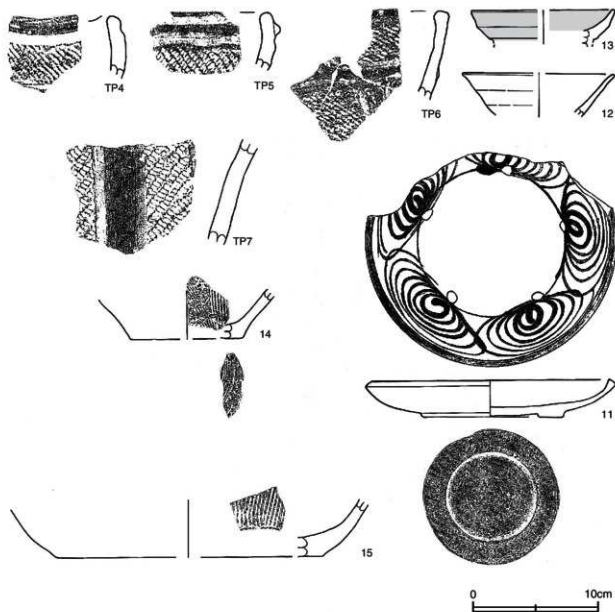
番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P1	24	19	12	P4	33	27	10
P2	35	35	36	P5	48	37	11
P3	42	39	57	P6	43	37	30

(5) 遺構外出土遺物 (第33・34図)

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物のうち, 特徴的なものを抽出して記載する。なお, 実測図と遺物観察表で示した。



第33図 遺構外出土遺物実測図(1)



第34図 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物観察表(第33・34図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考	
12	須臾器	坏	[11.9]	(3.3)	—	長石・石英・雲母	灰白	普通	内・外面ロクロナデ 口縁部わずかに外反する	表土中		
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土 胎色	粘 付 差	焼成	手法及び文様の特徴	産地・時期	出土位置	備考
11	陶器	那の目皿	18.8	2.9	11.0	灰白	内外両長石輪 灰白	普通	体部外面下縁直線 内・外面ロクロナデ トナノ貫入不全 削りだし高台	瀬戸・美濃系IIC後葉 →IIC前葉	SD1重土中	70% PL8
13	陶器	小皿	[11.2]	(2.7)	—	灰白	内外両長石輪	普通	外面ロクロナデ	瀬戸・美濃系IIC前葉	表土中	10% PL8
14	陶器	播鉢	—	(3.8)	[8.8]	灰黄陶 硝子黒	鉄軸	普通	底部回転糸切痕 内面目痕		表土中	
15	陶器	播鉢	—	(4.4)	[20.9]	灰黄陶 硝子黒	鉄軸	普通	内面目痕		表土中	
番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴			出土位置	備考		
TP4	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい陶	普通	口唇部直下に沈線が巡る 口縁部にRLの単節縄文			表土中			
TP5	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	普通	口唇部直下に沈線に沿う隆帯が巡る 口縁部にRLの単節縄文			表土中			

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
TP6	縄文土器	深鉢	灰石・石英・雲母	にぶい地	普通	口縁部注線が1つ発着による区画内にLRの単節編文 胴部地文にLRの単節編文施装沈線による区画文内を磨り出す	表土中	
TP7	縄文土器	深鉢	灰石・石英・雲母	橙	普通	胴部地文にRLの単節編文 縦方向2本の沈線間を磨り出す	表土中	

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	割片	2.7	2.3	1.0	4.0	珪質頁岩	横長割片 背面に多方向の割離痕を有する	SI3 覆土中	PL8
Q2	石核	2.5	2.3	2.0	10.8	珪質頁岩	細石刀用縦長割片の割離痕を片面に有する	SI3 覆土中	PL8
Q3	石核	3.4	2.5	1.5	11.1	珪質頁岩	細石刀用縦長割片の割離痕を片面に有する	表土中	PL8
Q4	石核	3.1	2.9	2.0	16.8	珪質頁岩	細石刀用縦長割片の割離痕を片面に有する	SI2 覆土中	PL8
Q5	石核	3.5	2.1	2.4	14.5	珪質頁岩	細石刀用縦長割片の割離痕を片面に有する	SI3 覆土中	PL8
Q6	細石刀	2.7	0.9	0.9	0.7	黒曜石	礫皮面が残る 背面に3本の稜を有し表面に彎曲する	SI3 覆土中	PL8
Q7	2次調整の有る割片	2.2	2.8	0.5	2.2	黒曜石	表裏面に多方向からの割離痕を有する横長割片	SI2 覆土中	PL8
Q8	石鏃	2.4	1.2	0.4	0.8	チャート	有基盤 基部欠損 両面押圧割離 縁部鋭歯状	表土中	PL8
Q9	石鏃	2.0	(1.4)	0.35	(0.7)	黒色緻密安山岩	両面押圧割離 縁部鋭歯状 基部欠損	SI3 覆土中	PL8
Q10	鐵石	(8.9)	6.6	4.9	(39.0)	デイスサイト	側面に敲打痕あり	表土中	PL8

## 第4節 ま と め

今回の調査で、縄文時代の堅穴住居跡2軒、平安時代の堅穴住居跡1軒、時期不明の井戸跡1基、土坑13基、溝跡2条が確認された。また、出土遺物は旧石器時代の細石刃核から近世の陶器と多時期にわたっている。ここでは、それぞれの時期と遺物について概要を述べ、まとめとしたい。

### 1 旧石器時代

確認できた遺物は、細石刃核4点、細石刃1点、割片2点である。

周辺遺跡では、小野川右岸で当遺跡の南東約6kmに所在する下大井遺跡の石器集中地点からは、ナイフ形石器、石核が出土している<sup>1)</sup>。小野川左岸では、当遺跡の南東約8kmに所在する中久喜遺跡から、ナイフ形石器が出土している<sup>2)</sup>。

遺構は確認されていないものの、調査区周辺及び小野川流域の台地縁部は、狩猟場もしくはキャンプ地の存在が想定できる。

### 2 縄文時代

堅穴住居跡2軒は、調査区中央部のやや北側に位置し、出土土器から中期後葉と考えられる。第1号住居跡からは、下端を平に整形した深鉢の口縁部のみが、炉の覆土下層からつぶれた状態で出土している。また、2号住居跡からは、炉の覆土下層から炉の火床部を囲むように深鉢や浅鉢の口縁部片がつぶれた状態で出土している。いずれも、土器埋設炉・土器片囲炉としての利用が想定される。

周辺遺跡では、南西8kmに所在する前田村遺跡G・H・I区の堅穴住居跡から土器埋設炉と土器片囲炉が確認されている<sup>3)</sup>。

### 3 平安時代

堅穴住居跡は1軒のみが確認されている。遺物数が少ないが、時期は、竈の覆土下層から出土している坏と南東コーナー部に竈をもつ構造から9世紀後半と考えられる。

周辺遺跡では、北東5kmに所在する東岡中原遺跡から南東コーナーに竈をもつ9世紀後半の住居跡が確認されている<sup>4)</sup>。

## 4 小 結

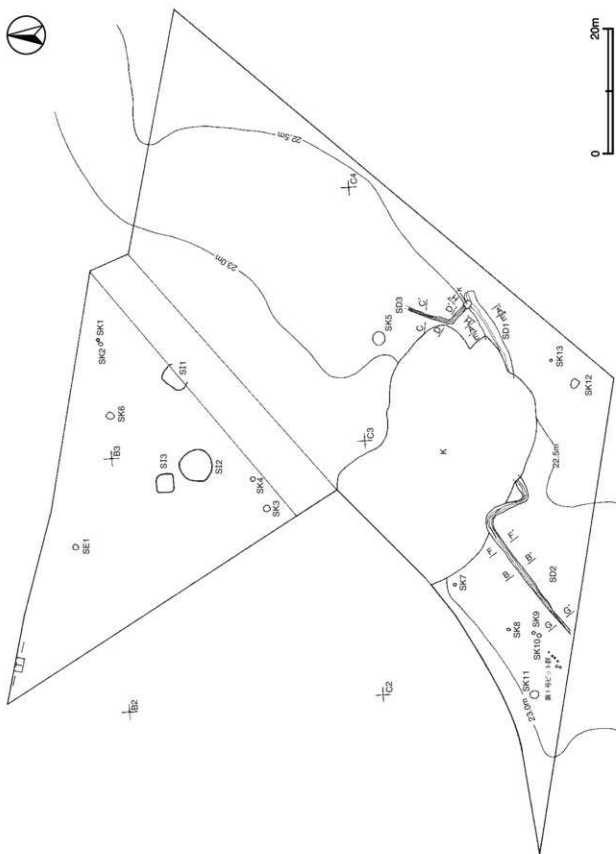
今回の調査で確認された遺構は、縄文時代中期後葉の堅穴住居跡が2軒と平安時代の堅穴住居跡が1軒のみであるが、霞ヶ浦に南流する小野川と蓮沼川沿に囲まれた台地縁辺部には、旧石器時代から近世にかけての遺跡が点在している。今回は限られた調査区域であり、遺跡の全容については今後の調査が待たれるところである。

## 註

- 1) 川津法伸 「一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ 下大井遺跡」『茨城県教育財団文化財発掘調査報告』第171集 2001年3月21日
- 2) 荒井保雄 「牛久北部特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅱ) 中久喜遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第86集 1993年9月30日
- 3) 吹野富美夫 宮崎修士 柴田博行 「伊那・谷和原丘陵部特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書4 前田村遺跡G・H・I区」『茨城県教育財団文化財調査報告』第146集 1999年3月19日
- 4) 高野節夫 白田正子 仲村浩一郎 島田和宏 「中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ 中原遺跡3」『茨城県教育財団文化財報告』第170集 2001年3月21日

## 参考文献

- ・仙波 亨 「コーナーに竈をもつ住居跡について」『研究ノート』9号 財茨城県教育財団 2000年6月



第35図 手代木田向西遺跡遺構全体図

# 付章 新井南山遺跡における溝埋積物のテフラ分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

つくば市に所在する新井南山遺跡は、霞ヶ浦西方に分布する筑波幅数台地の東部に位置する。筑波幅数台地は、南関東の小原台面（武蔵野台地のM1面）に対比される上位台地Cに区分されている（貝塚ほか編、2000）。発掘調査では、表層の耕作土とされる層位の下位に埋積した溝状の遺構が検出されているが、遺構に伴う遺物はほとんど認められていない。

本報告では、これらの溝状の遺構について、その埋積土層における、噴出年代の明らかにされている指標テフラの産状を調べることにより、その構築あるいは廃棄の年代に関わる資料を得ることを目的とする。

## 1. 試料

試料は、SD-1およびSD-2とされた2基の溝状の遺構で作製された横断面より採取した。発掘調査所見により、SD-1の断面では、表層の耕作土層およびその下位に黄褐色の耕作土層が認められ、その下位に上位より1層から8層までの遺構埋積層が分層されている。これらのうち、1層は黒色、5層は黒褐色を呈し、2～4層は暗褐色、8層は暗黄褐色を呈する。試料は、表層の耕作土層、黄褐色の耕作土層、1～5層および8層の各層から1点ずつの8点を採取し、上位より試料番号1～8を付した。さらに、SD-1の調査区北壁の1層、同調査区南壁の1層、5層の各層より試料を1点ずつ採取した。分析には、これらの試料のうち、黄褐色の耕作土層および8層を除く計9点を供した。

一方、SD-2の断面でもSD-1と同様に1層から8層までの分層がなされている。各層の色調もSD-1の同名の各層とそれぞれほぼ同様である。試料は、1層～5層および8層の各層から1点ずつの6点を採取し、上位より試料番号1～6を付した。さらに、SD-2の調査区南壁の1層より試料を1点採取した。分析には、これらの試料のうち、8層を除く計6点を供した。

## 2. 分析方法

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山ガラスについては、その形態によりバブル型と中間型、軽石型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつき目をなす部分であるY字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

## 3. 結果

分析結果を表1に示す。以下に地点ごとに結果を述べる。

SD-1：スコリアはいずれの試料にも全く認められない。火山ガラスは、1層に少量、2層に微量、3～5層には極めて微量認められた。いずれの試料も、無色透明のバブル型である。軽石は、表土に中量、1層に微量、2層および3層に極めて微量認められた。これらのうち、表土の軽石は、最大径約1.5mm、灰白色を呈し、発泡は

表1. テフラ分析結果

道構名・地点名	色調	層名	試料 番号	スコリア		火山ガラス		軽石			由来する テフラ
				量	量	色調・形態	量	色調・発泡度	最大粒径		
SD-1	暗褐色	表土	1	—	—			+++	GW・g~sg	1.5	As-A
	黒色	1層	3	—	++	cl-bw	+		GBr・sb	1.5	As-B
	暗褐色	2層	4	—	+	cl-bw	(+)		GBr・sb	1.0	As-B
	暗褐色	3層	5	—	(+)	cl-bw	(+)		W・b	1.0	Hr-FA
	暗褐色	4層	6	—	(+)	cl-bw	—				
	黒褐色	5層	7	—	(+)	cl-bw	—				
SD-1調査区北壁	暗褐色	1層		—	+	cl-bw	+		GBr・sb	1.0	As-B
SD-1調査区南壁	黒褐色	1層		—	+	cl-bw	++		GBr・sb	1.0	As-B
	黒褐色	5層		—	+++	cl-bw	(+)		W・b	1.2	Hr-FA
SD-2	黒褐色	1層	1	—	+	cl-bw	(+)		W・b	0.8	Hr-FA
	暗褐色	2層	2	—	(+)	cl-bw	(+)		W・b	0.8	Hr-FA
	暗褐色	3層	3	—	++	cl-bw	(+)		W・b	1.0	Hr-FA
	暗褐色	4層	4	—	+++	cl-bw	—				
	黒褐色	5層	5	—	++	cl-bw	—				
SD-2調査区南壁	黒褐色	1層		—	++	cl-bw	(+)		GBr・sb	1.0	As-B

凡例 —:含まれない。(+):きわめて微量。+:微量。++:少量。+++ :中量。++++:多量。  
 B:黒色。G:灰色。Br:褐色。GB:灰黒色。GBr:灰褐色。R:赤色。W:白色。GW:灰白色。  
 g:良好。sg:やや良好。sb:やや不良。b:不良。最大粒径はmm。  
 cl:無色透明。br:褐色。bw:バブル型。md:中間型。pm:軽石型。

良好~やや良好,斜方輝石の斑晶を包含するものも認められた。一方,1層および2層の軽石は,最大径約1.5mm,灰褐色を呈し,発泡はやや不良,斜方輝石の斑晶を包含するものも認められた。さらに,3層の軽石は,最大径約1mm,白色を呈し,発泡は不良,角閃石の斑晶を包含するものも認められた。

SD-1調査区北壁1層:微量の火山ガラスと微量の軽石が認められた。火山ガラスは無色透明のバブル型であり,軽石は,SD-1の1層および2層の軽石と同様の特徴を有する。

SD-1調査区南壁:1層には,火山ガラスが微量,軽石が少量認められ,5層には火山ガラスが中量,軽石が極めて微量認められた。火山ガラスは,いずれも無色透明のバブル型である。軽石については,1層の軽石はSD-1の1層および2層のものと同様であるが,5層の軽石はSD-1の3層の軽石と同様である。

SD-2:スコリアはいずれの試料にも全く認められない。火山ガラスは,1層に微量,2層に極めて微量,3層および5層には少量,4層には中量認められた。いずれの試料も,無色透明のバブル型である。軽石は,1~3層に極めて微量認められた。いずれの軽石もSD-1の3層の軽石と同様である。

SD-2調査区南壁1層:少量の火山ガラスと極めて微量の軽石が認められた。火山ガラスは無色透明のバブル型であり,軽石は,SD-1の1層および2層の軽石と同様の特徴を有する。

#### 4. 考察

##### (1) 指標テフラの同定

SD-1の表土に中量認められた軽石は,軽石の特徴と産出層位および新井南山遺跡の地理的位置におけるテフラの分布(例えば町田・新井(2003)など)から,江戸時代の天明3年(AD1783)に浅間火山から噴出した浅間Aテフラ(As-A:荒牧,1968;新井,1979)に由来すると考えられる。一方,SD-1の1層,2層,

SD-1調査区北壁の1層，同南壁1層さらにSD-2調査区南壁1層に認められた軽石は，軽石の特徴と新井南山遺跡の地理的位置におけるテフラの分布（上述）から，平安時代の天仁元年（AD1108）に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ（As-B；荒牧，1968；新井，1979）に由来すると考えられる。

SD-1の3層，SD-1調査区南壁の5層，SD-2の1～3層に認められた軽石は，軽石の特徴と新井南山遺跡の地理的位置におけるテフラの分布（上述）から，古墳時代の6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳洪川テフラ（Hr-FA；新井，1979；早田，1989）に由来すると考えられる。

なお，各試料中に認められた無色透明のバブル型火山ガラスは，これまでの茨城県南部における台地上の土壌（いわゆるロームおよび黒ボク土）の分析例から，ローム層の上部に多く含有される始良Tn火山灰（AT；町田・新井，1976）に由来すると考えられる。

## (2) 遺構の年代について

SD-1については，表土中にAs-Aの軽石が比較的多く含まれ，下位の遺構埋積層中からはAs-Aの軽石を全く認めることができないことから，As-Aの降灰した1783年頃には，SD-1は完全に埋積した状態であったと考えられる。次に，As-Bの降灰とSD-1との関係については，以下のように考えることができる。仮に，SD-1の構築が，As-Bの降灰より以前であったとした場合には，SD-1の機能時あるいは廃棄された後の埋積時にSD-1内にAs-Bが降下堆積する。ここで，As-Bの噴出量（体積）はAs-Aを上回り，かつ両テフラの分布はほぼ同様である（町田・新井，2003）ことを考慮すれば，SD-1内にAs-Bが降下堆積した場合には，その埋積層中には，少なくとも上述の表土中におけるAs-Aと同量以上のAs-Bの軽石が含有されているはずである。しかし，埋積層中におけるAs-Bの軽石の量は結果に述べた通りである。したがって，SD-1の構築は，As-Bの降灰よりも後，すなわち12世紀初頭よりも以後である可能性が高い。このことは，埋積層中からAs-Bの軽石が全く検出されなかったSD-2において，より確実であると言える。以上のことから，SD-1およびSD-2ともに，その構築年代はAs-Bの降灰した12世紀初頭以降であり，As-Aの降灰した18世紀末には完全に埋積され，地表からは窺い知ることのできない状態であったと考えられる。

なお，遺構の埋積は，基本的には降雨や重力により，遺構の壁を構成している土層や周囲の土層から砕屑物が供給されることにより進行すると考えられる。今回の分析により埋積層中から検出された軽石（As-B，Hr-FA）および火山ガラス（AT）は，遺構が構築された時には既に周囲の土層中に含まれていたと考えられ，遺構を埋積した砕屑物に含まれていたと考えられる。

## 引用文献

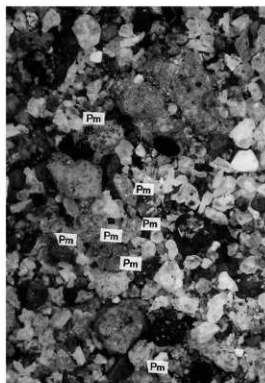
- 新井房夫，1979，関東地方北西部の縄文時代以降の指標テフラ層，考古学ジャーナル，157，41-52。  
荒牧重雄，1968，浅間火山の地質，地学団体研究会専報，14，1-45。  
貝塚爽平・小池一之・遠藤邦彦・山崎晴雄・鈴木毅彦編，2000，日本の地形4 関東・伊豆小笠原，東京大学出版会，349 p。  
町田 洋・新井房夫，1976，広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義—，科学，46，339-347。  
町田 洋・新井房夫，2003，新編 火山灰アトラス，東京大学出版会，336 p。  
早田 勉，1989，六世紀における榛名火山の二回の噴火とその災害，第四紀研究，27，297-312。



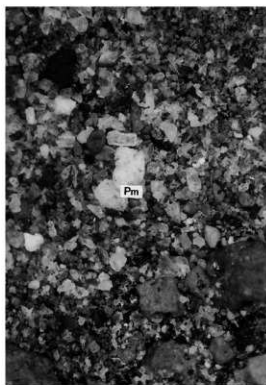
図版1 テフラ



1. As-Aの軽石 (SD-1;1)



2. As-Bの軽石 (SD-1 調査区南壁;1層)



3. Hr-FAの軽石 (SD-2;3)

Pm: 軽石

1.5mm

写 真 図 版

新 井 南 山 遺 跡  
手 代 木 田 向 遺 跡

第1号住居跡  
完掘状況



第1号住居跡  
遺物出土状況



第1号陥し穴  
完掘状況





第1・2号溝跡完掘状況



第1号溝跡土層断面



第2号溝跡土層断面



第1・2号溝跡完掘状況



第1号道路跡完掘状況



SI1-1



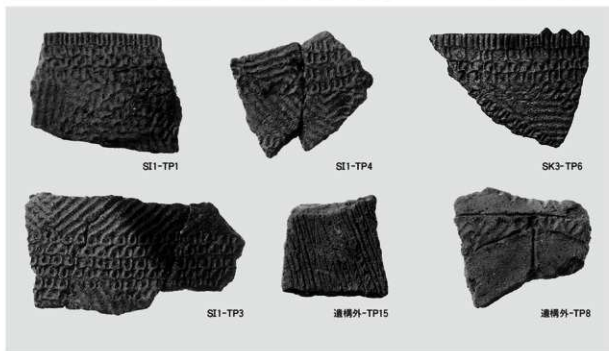
遺構外-3



遺構外-6



遺構外-5



SI1-TP1

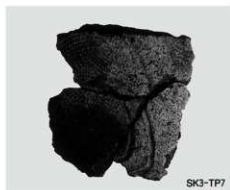
SI1-TP4

SK3-TP6

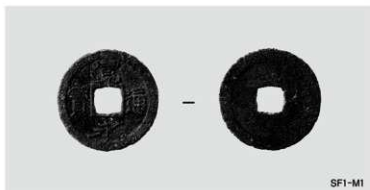
SI1-TP3

遺構外-TP15

遺構外-TP8

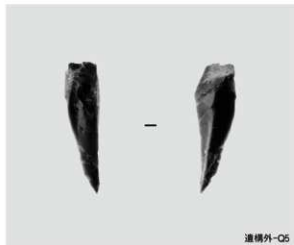
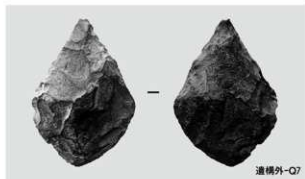
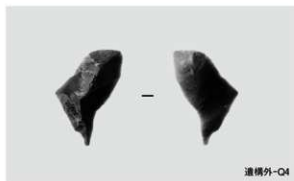
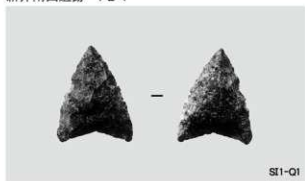


SK3-TP7



SF1-M1

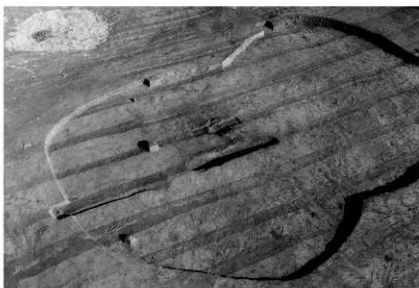
第1号住居跡、第3号土坑、第1号道路跡、遺構外出土遺物



第 1 号住居跡炉  
遺物出土状況



第 2 号住居跡  
完掘状況



第 2 号住居跡炉  
遺物出土状況





第 3 号住居跡  
完掘状況



第 1 号井戸跡  
完掘状況



調査区全景







第1号住居跡、遺構外出土遺物、石器

茨城県教育財団文化財調査報告第267集

**新井南山遺跡  
手代木田向西遺跡**

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道  
新設工事地内埋蔵文化財調査報告書

平成19(2007)年 3月19日 印刷  
平成19(2007)年 3月23日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団  
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2  
茨城県水戸生涯学習センター分館内  
T E L 029-225-6587

印刷 株式会社 須崎印刷  
〒315-0013 茨城県石岡市府中1-3-16  
T E L 0299-22-4658